三虎、大虎等の島嶼が見える、これは目下海賊の巣窟地で船舶の難を蒙るもの頻々であるが政府はこれを如何ともすることが出來ない。一行は上陸して十即ち稅關出張所を訪うた、十は小高い斷崖の上の孤屋で、内に一人の英人即ち出張員がゐる丈けである、此の附近には殆ど人家が無いから、已を得ず英人に乞うて食を辨じ寢具を供して貰つたのである。

一行は試みに英人に南宋最後の遺跡を問うたが彼は極端なる無識漢で、南宋とは何であるかと反問する、村民を呼んで問はんとすれば我等は一語も此の地方の語を知らぬ、筆談を試みんとすれば彼は一字も漢字を解しない。非常に當惑したのであつたが窮すれば通ずとかや、山下の一漁村を彷徨して當もなく探檢してゐる中にやゝ事を解する一漢を得て、南宋最後の行宮の遺趾及び廟祠の所在地點を明かに探知し得た。此の日は十に一泊し翌日豫定の踏査を行ひ、其の翌日厓山を發して第五日に廣東に歸著したのである。

其の四　行宮の遺跡

予等一行は行宮の遺跡を訪ふべく早朝厓門十から小舟に乘つて海路西北に進み、東砲臺を過ぎ天后宮の岬を經て四浬の行程の後厓山の西麓なる官涌と云ふ一漁村に達した。戸百許りの小村ながら此の邊での大邑で港口には百餘の船が艤集してゐる。上陸して四方の地形を觀望するに、此の邊一體の沃野で、田畝相連り東には厓山高く聳え西は熊海の水廣く、南と北とには厓山の支脈突出して海に落ち、内に包みたる平地の大さは縱横各二十町餘りもあらんか、大凡我が鎌倉の地形に似てやゝこれよりも廣いのである。此の平野が即ち南宋最後の行宮の地で、前に彌る熊海は即ち南宋幾千の兵船の沈沒した古戰場である。

海岸から約五町許り東行すると低い緩かな小丘の傾斜に沿うて南に面して一郭の廟がある。廟の後に接して鈍い圓錐狀の土地の隆起がある、土人の說明に由つて此の隆起が南宋廢帝の妃にして端宗の生母なる楊太后の陵であり、其の前の廟が太后を祀る全節廟及び大忠祠義士祠の一郭であることが分つた。一行は即ち此の陵と廟の調査に一日をこゝに費したのである。

先づ此の陵に就いて調査し見るに、これは始より楊太后の陵として作られたものではなく、廟が出來た後に作られたものである。何となれば廟は今こそ左右同形の凸字形の輪郭を有し、陵は正しく其の後に當るが、元來は東の端にある大忠祠と云ふのが先づ建立され、次に中央の全節廟が建てられ、同時に大忠祠が擴張せられ、終に西の端に義士祠が出來、終に三廟を一郭に纏めたのであるから（後章に詳述す）、此の陵は其の後又は其の時に一郭の正中に築かれたものでなければならぬ。若しも陵が始めからこゝに在つたものとすれば、大忠祠は始め故らに陵の正中を避けて建てられたものとなる。或は陵は始めから此處に在つたので、全節廟建立の際大忠祠の位置を變じ全節廟を中心に置いたものと考へられ得るが、それにしては記錄の上に楊太后の陵を明記したものが見當らぬ。楊太后の陵に就いては左の記錄がある。

（一統志）　楊太后陵在厓山海濱時太后聞變赴海張世傑營葬倉卒莫辨其地

又端宗の永福陵も厓山に在ると云ふが、其の所在地點は全く不明である。

（廣東考古輯要）　宋端宗永福陵新會縣南厓山張世傑所葬按舊志言景炎帝崩於碙州至香山殯馬南寶家後葬壽星塘山中有陵跡五處莫知眞陵所在鄧光薦家所傳墳海錄則以爲在厓山光薦甞隨駕目擊其事則在厓山無疑

（廣東新語）　宋端宗崩於碙州時會淵子克山陵使奉帝還殯于沙衝馬南寶家佯爲梓宮出葬其實永福陵在厓山也今新會壽星塘山中有陵迹五處以遺民隱諱故得免于會稽之禍

即ち厓山に在ると云ふは眞實らしいが其の地點は分らぬ、勿論今の太后陵とは無關係であるに相違ない。

但し此の平野が行宮の所在地であることは確實であると思ふ、第一厓山の西方の平地で、行宮を營み軍屋を建て數千若くはそれ以上の兵員を備へ得る地點はこゝより外にないと思ふ。又厓山海戰の狀況より考へても是非此所で無ければならぬ。且つ大忠祠、全節廟等を建てるに舊行宮の敷地を選ぶは常識から考へても當然のことと云はねばならぬ。次にこれに關する記錄を拔萃して見よう。

（廣州府志）　宋慈元殿在厓山行宮之後帝昺建以奉太后楊氏故名明弘治四年於遺趾建廟額全節

（一統志）　宋行宮有四一在新會縣南水厓宋末張世傑奉帝昺至此遣人入山伐木造行宮及軍屋三千餘間宮後爲慈元殿奉楊太后尋燬。一在香山縣南沙埔村宋侍郎馬南寶家端宗駐蹕於此舊傳端宗自閩入廣行宮三十餘所此其一也。一在新安縣梅蔚山間。一在新安縣官富場

（經世大典）　……初弘範至甲子門獲宋斥候劉青顧凱知帝棲於厓山之西……（廣州府志）

行宮が厓山の西麓に在つたことは明白である、西麓であれば此の地點以外に適當な地はないのである。府志の今の全節廟は古への行宮の趾に建てたものと云ふ記錄が正しいとすれば、始より論はないのである。

其の五　大忠祠

廟の東部が大忠祠で、其のプランは、本殿、左右配殿、牌樓及び門（第七〇六圖）より成り、前面の間口約三十尺、總體の奥行約百十四尺位である。此の廟の由緒は門の後方にある成化十三年の大忠祠記の碑銘に由つて詳かである。廣州府志に其の沿革の要領を載せて云く、

大忠祠在厓山明成化十二年僉事陶魯搨建以祀宋信國公文天祥丞相陸秀夫太傅張世傑初名忠義祠奏請特賜今額加封謚與祭祀嘉靖九年巡按李美建行祠於圭峰山下十一年加增秋祭復祀厓山二十一年趙善鳴旱請修厓山祠增兩廡從祀死難諸臣改題厓山刻石建哀歌亭

即ち明の成化十二年に初めて建立されたのであるが、始めはたゞ文天祥、陸秀夫、張世傑の三人丈けを祀つたのであつた。然るに嘉靖九年に至つて祭祀を新會縣の圭峰山で行ふこととした爲めに、厓山の廟祠は大いに廢頽した。即ち嘉靖二十一年に趙善鳴なるものが奏請して厓山の廟祠を修理して祭祀を復興し、更に東西配殿を建て殉難諸臣を合祀したのである、事は全節廟內の碑に詳述してある。今其の全文を左に揭げる。

重修厓山全節大忠二祠記　　知新會縣事雩都何廷仁撰

全節廟大忠祠原建於厓山厓山濱海風波險阻有司歲時難於修祀乃議遷行宮行祠於邑圭峰山有司脩祀遂成常典而厓山廟祠因而廢墜十有三歲矣卿大夫趙君善鳴憫祀典不正白于提督大司馬半洲蔡公巡按澤山姚公移核憲副退齋

林公議脩復之於是復核新會縣知縣何廷仁主簿孫從善務協謀經度盡振其頽而督責修理主簿孫從善尤專委焉或曰環厓皆海也惟東梵九曲山延袤八十里風潮時作浪捲滄溟舟師股慄不敢進瞻祠者往往望厓而止孰若附祀圭峰將有以慰欽崇之思耶況忠烈精英無往不在正所謂掘地求泉隨在見水又何必厓山之祀也哉噫是非三公脩復之意耳夫元人凌陵侵我中國威逼二乘蹤河蹈海而丞相陸公秀夫少傅張公世傑乃收殘敗之餘擁帝厓門將致力中原以期恢復豈期事勢窮促秀夫猶從容收玉璽負幼帝同投厓石帝崩而秀夫死之繼而皇太后死之張世傑又死之扈從之臣如劉鼎孫茅湘之與三軍同趣而死○屍浮蔽海丞相文公天祥雖死於帝崩五年之後而詩贊世傑其心蓋已決於厓山之戰矣嗚呼死重大山而○國之師輕猶鴻毛夫豈不愛生也哉志在綱常義不與虜奪也是故幼帝之死死於國也幼帝死則○死社稷之義盡而父子之倫明太后之死死於國也太后死則守身之道盡而夫婦之倫明三忠之死死於國也三忠死則託孤之心盡而君臣之倫明若夫劉鼎孫茅湘趙樵高桂伍隆起之死固皆以身徇國者而士卒數十萬亦隨赴之此何謂耶昔田橫士五百守死海島不肯叛橫而降漢至今義之況於厓門之士死義之正乃不肯背帝而降虜又豈橫士可同日而論哉由是觀之中原土宇元固能奪之矣而五帝三王曆數正傳元不能奪乃得使授首於厓山之陽中國冠裳元固能裂之矣而數十萬忠貞元不能奪乃得使就縛於滄波之上是其所能者雖足以勝天未定之數要之中國禮義自定之天又非胡虜所能盡勝之也是故光岳之氣不隨沒於腥風而獨存於厓巔豈夫欲自定將有所付屬以勝之耳嗚呼厓山之祠關係若此今日脩復又豈細故也哉況於三公闡幽之意亦不過崇重綱常以補前人未發之旨蓋又不專以祠之脩否爲重輕也雖然欽崇祠典有司之責也後之有司不能倡義脩復顯光祠宇乃畏險自阻若爾使在當時得隨張陸之後親冒矢石而出入滄溟則視厓門不知又何如也予併及之將以告夫後之脩祀君子嘉靖二十一年十二月二十二日也

此の碑銘に所謂圭峰山は、廣東新語によれば新會縣城の北二里許りにある有名な靈山である。又合祀されたる諸士のことは後章にこれを述べるのである。府志に所謂哀歌亭は何處に建てられたか不明であるが、府志には「哀歌亭在厓山側久廢」とあるのみである。

陳白沙の哀歌亭の詩は左の如きものである。

祠堂千頃壓江波。張陸之名更可磨。唯少當時文相國。一間亭子表哀歌。

又大忠祠の門に今日現に文天祥正氣歌の碑（第七〇八圖）がある。篆額に宋文丞相信國公正氣歌石碑とあり、終りに

巡按廣東監察御史楊以誠篆

提督學校廣東按察司副使陳體建

嘉靖丁未正月吉廣州府通判龔良猷刻

とある。字體頗る奇にして珍なものであるが、劈頭「天地有正氣」と云はずして「天下有正氣」と書いてあるは何故か合點が行かぬ、但し牌樓の扁には天地正氣と大書してある。

其の六　全節廟

全節廟（第七〇四・七〇五圖）は楊太后の位を安ずるところで大忠祠の西に接し、間口約六十尺奥行約百五十七尺

の一郭である。其の正殿を慈元殿と云ひ、後に後殿があり、前に左右一對の配殿がある、配殿の前に左右に碑亭があり、其の前は即ち門である。此の廟は規模も大きく建築も立派であるが、就中慈元殿が最も重要で最も立派なる建築である。此の廟の由來は

（府志）　宋慈元殿在厓山行宮之後帝昺建以奉太后楊氏故名明弘治四年於遺趾建廟額全節

とあつて簡明に分るが、尙ほ其の詳細なことは後殿に於ける慈元廟碑に由つて明亮である。此の碑は陳白沙の撰並に書で誠に面白いものである。陳白沙は晩年に茅筆を用ひたとある、如何なる筆かよく知らぬが、字畫は飛白の樣にかすれてゐるので、しかも稜々たる氣韻に滿ちて如何にも面白い。此の碑は陳白沙の書の中でも殊に有名なもので、廣東新語にも

慈元廟浴日亭莊節婦諸碑學人心爲寶

などとある、碑銘の全文は左の如くである。

慈元廟碑

世道升降人有任其責者君臣是也予少讀宋史惜宋之君臣當其盛時無精一學問以誠其身無先王政敎以新天下化本不立時措莫知雖有程明道兄弟不見用於時迹其所爲高不過漢唐之間仰視三代以前師傅一尊而王業盛獻猷既出而世道亨之君臣何如也南渡之後惜其君非拔亂反正之主雖有其臣任之弗專邪議得以間之大志弱而易撓大義隱而弗彰景敵玩讐國計日非往坐失機會卒不到成恢復之功至於善惡不分用捨倒置刑賞失當怨憤生禍和議成而兵益衰歲幣多而民愈困如久病之人氣息奄々以及度宗之世則不復惜爲之掩卷出涕不忍復觀之矣孔子曰人之生也直罔之生也倖而免劉夕靖廣之以詩曰王綱一紊國風沈人道方乖鬼境侵生理本直宜細玩者魂萬古在人心噫斯言也判善惡於一言決興亡於萬代其天下國家治亂之符驗歟宋室播遷慈元殿草創于邑之崖山宋亡之日陸丞相負少帝赴水死矣元師退張太傅復至崖山遇慈元后問帝所在慟哭曰吾忍死萬里間關至此正爲趙氏一塊肉耳今無望矣投波而死是可哀也厓山近有大忠廟以祀文相國陸丞相張太傅弘治辛亥冬十月今戶部侍郎前廣東右布政華容劉公大厦行部至邑與予泛舟厓門弔慈元故趾始議立祠於大忠之上邑著姓趙思仁請興土木公許之予贊其決曰祠成當爲公記之未幾公去爲都御史修理黃河委其事府通判顧君升龍甲寅冬祠成是役也一朝而集制命不由於有司所以立大閑愧頹俗而輔名敎人心之所不容已也碑於祠中使來者有所觀感弘治己未夏予病小愈尙未堪筆硯以有督府鄧先生之命念慈元落々東山作祠之意久未聞於天下力疾書之愧其不能工也南海病夫陳獻章識

慈文已脫藁久未入石者聞東山先生再請西涯先生爲作此記許之姑留以待之耳弘治己未夏府別駕高君行部至邑問其故歎息久之曰先樹此碑於廟中竢西涯文字至再刻兩碑竝立金輝玉映照宇宙慈元得之尤爲全

○東山之意寧不在是耶卽尋通之督府鄧先生遂命別駕終其事云　門人增城湛雨跋

卽ち慈元廟建立の發起者は劉大厦と陳白沙とで、資金を出したのは趙思仁と云ふ人である。發議は弘治四年辛亥で、陳白沙が此の碑文を書いたのは弘治十二年己未である。しかも陳白沙が病を力めて書いたので此の碑が建つた翌年に陳白沙は死んだのである、陳白沙等は大忠祠に三忠臣が祀られてゐるのに楊太后を祀る祠の無いのは

遺憾であると云ふ主意で此の廟を創建したのであらう。其の位置は碑文に立祠於大忠之上とあるが、大忠祠の横であつたか上であつたか不明である。其の後大忠祠と共に圭峰山で祭祀が行はれて廟祠廢頽に歸したので、嘉靖二十一年に重修されたのが即ち今の位置で今の建築である。

其の七　義士祠

義士祠は全節廟の西に隣り、大忠祠と同大の規模である。即ち南宋最後の兵士及び婦女を祀るところである。府志に

忠義壇在全節廟左明嘉靖二十二年知縣何廷仁建祀宋死義將士

とあるのが即ちこれである。即ち全節廟、大忠祠が重修された後、引きつゞいて此の義士祠が建てられたのである。其の建築の配置もほゞ大忠祠に同じであるが、唯これは東西の配殿の代りに一宇の前殿がある。

今當時の計畫を考ふるに、何廷仁が全節大廟、忠祠を重修するとき、既に義士廟を附加する考按を定めたものと見える。即ち全節廟を中央として其の左右に大忠祠と義士祠を接續して正しい左右均齊の規模となし、更に三祠の前に共通の庭を取り、これを繞らすに外壁を以てし、其の南面に正門を作り、東西に腋門を設け、全節廟の後に山陵を作つてこれを楊太后の陵となし、全體の計營こゝに至つて始めて大成したものと思はれる。

嘉靖二十二年規模完成した後の沿革はよく分らぬ。勿論度々修繕されたに相違ない。現に其の瓦を一見しても隨分異なつた時代のものと見えるのが混用してある。其の最も古い瓦は即ち此處に持參して來たもので、これは慥かに嘉靖二十一年のものと信じられる、これは大忠祠の配殿のもので、これを清初清末等の瓦に比べて見ると慥かに古式を存してゐるのである。（第七〇八圖甲・乙）

但し以上三祠の建築は、建築としての價値は決して大なるものではない。否寧ろ平凡なる廟祠建築である。勿論南清式の凡ての特色を發揮したものでも無い、こゝに慈元殿の前面大忠祠の牌樓の寫眞（寫眞略）がある。これに由つて其の一斑を知ることが出來る、別に三祠の外壁を西南より見た寫眞がある（寫眞略）。

其の八　殉難の忠臣及び烈婦

次に此の三祠に祀られたる忠臣烈婦の神位の文字を掲げて見ると左の如くである。

全節廟	慈元殿	宋景炎楊太后之神位
	東配殿	故宋同死國事宮殯妃等神位
	同上	
	同上	
	西配殿	故宋同死國難烈婦陳氏神位
		故宋忠烈婦陸夫人神位
		故宋同死國事諸臣婦女等神位

大忠祠

正殿

宋左桂國左丞相兼樞密使前參議准東制置司事陸公諱秀夫神位
宋少保右丞相兼樞密使前開府南劍州經略寧海節度使直學士院信國公文公諱天祥神位
宋太傅樞密院鎮守府前湖副都統制總督府諸軍慈國公張公諱世傑神位

東配殿

故宋忠義同死國事諸臣神位
故宋大卿招討使杜公諱滸神位
故宋殿前指揮使蘇公諱劉義神位
故宋忠義兵部侍郎茅公諱湘神位
故宋禮部尚書徐公諱宗仁神位
故宋翰林院大學士劉公諱鼎孫神位

西配殿

故宋樞密使高公諱桂神位
故宋吏部侍郎趙公諱檡神位
故宋防禦使劉公諱師男神位
故宋工部侍郎馬公諱南寶神位
故宋義士贈州判伍公諱隆起神位
故宋同死王事于廣諸臣神位

義士祠

正殿

故宋忠義同死衆官軍士等神位
故宋忠義同死衆官軍士婦女等神位

次に少しくこれ等の人の事蹟を極く簡單に述べて見たい。

全節廟慈元殿内に祀られたる楊太后は、南宋度宗の妃で端宗の生母であり、厓山にて水に赴いて死んだのであるが、詳細のことは省略する。次に烈婦陳氏と云ふは日本の物語によくある様な賢母であつた。

（厓山志）南海婦陳氏東莞烏沙人嬪於李祥興帝次厓山陳氏屬其子佳且訣曰往事宋勿以我故懷二心遂趨黃木灣赴水聞者悲之（廣州府志）

大忠祠本殿の文天祥、張世傑、陸秀夫の事は今更云ふまでも無い。其の東西配殿に祀られた者に就いて言へば、

第一、杜滸字は貴郷、丞相範の從子である。始め文天祥と共に奔走したが、後厓山に趨りて元に執へられ憂憤して病死した。

第二、蘇劉義は荆湖の人、端宗が井澳で劉深に襲撃されたとき、陳宜中が援兵を求めると稱して占城に逃げた、劉義これを追跡したが及ばなかつた、厓山の敗戰に張世傑と共に海洋に奔つたが麾下の爲めに殺された。

第三、茅湘は京口の人、厓山にて妻子諸とも帝昺に從つて海に沈んだ。

第四、徐宗仁は永豐の人、端宗に從ひ海戰に敗れて死んだ。

第五、劉鼎孫字は伯鎭、江陵の人、厓山にて家族と共に海に入つたが元兵に執へられ慘酷なる苛責を受けたが一夕囚を脱し海を蹈んで死んだ。

第六、高桂は汴梁の人、厓山にて殉死した。

第七、趙檡も厓山に水死した。

第八、劉師勇は廬州の人、端宗帝昺に從つて盡瘁したが、時事爲す可からざるを見て憂憤酒を縱にし、終に醉死した。

第九、馬南寶は香山の義士である。已の家を擧げて端宗の行宮となし粟千石を獻じて軍を餉うた、端宗の崩じた時も其の家に殯したと云ふ。

第十、伍隆起に就いては廣東新語に次の珍話がある。

香頭墳　在新寧縣境宋末帝舟次厓門新寧有伍隆起者以三世受國恩非死不報於是貢米七千石率其鄉人捍衞時賊臣張弘範已入廣州隆起奮身與戰累日不沮潛爲其下謝子文所殺以首投降丞相陸秀夫使人收葬以香爲首其墳因曰香頭墳

此の外宋末の忠臣義士はなほ少く無い。思州で戰死した張烈良、二女を抱いて妻と共に、厓山に入水した賈純孝、厓山で死んだ張達、殊に其の妻陳壁孃は夫の屍を得てこれを葬り、夫能く忠に死す吾能く節に死せざらんやと云つて門を閉ぢて食はずして死んだ。鄧光薦は厓山で海に投じたが元兵に執へられ、終に元に仕へたのは聊か破格である。此の人端宗の陵が厓山にあることを證言してゐる。

厓山の古蹟は此の祠堂以外にも必ず何か有るのであらうと思ふ、併しこれを知るべき手がゝりが無い。若し多くの日子を費して根氣よく探檢したならば或は何か發見し得るかも知れぬが、自分はそれ丈けの餘裕を有たなかつた。即ち古蹟としては僅かに此の祠堂、同時に又厓山行宮の故地丈けを視察したのみであつた。

第二編　海戰記

其の一　廣東省に於ける端宗駐蹕の地點

支那歷朝の末路は何れ悲慘ならぬは無いが南宋の末路ほど悲慘なものは稀れである。元の至元十三年正月（南宋の景炎元年、我が後宇多天皇建治二年）南宋の都臨安城は元の伯顏の爲めに占領せられ、恭宗は敵に執へられて事實上南宋は滅亡したのであるが、遺臣張世傑、文天祥、陸秀夫等は恭宗の兄昰を福州に奉じて帝（卽ち端宗）となし、宋の社稷を恢復せんとした。然るに元軍の追擊甚だ急にして宋軍はこれに抵抗し難く、海路を諸々方々に逃げ廻つて結局廣東の碙州で端宗は死んだ。今餘談に亙るの嫌ひはあるが、廣東省に於ける端宗の駐蹕の地點を列擧して見たい。勿論自分は歷史に對しては門外漢であり、且つ零碎なる參考書に由つたのでないから其の疎漏杜撰は免れない。願くば諸君の叱正を賜らんことを。按ずるに端宗の水軍は至元十三年の末に於いて廣東省の潮州に次し、紅螺山に駐蹕した、大淸一統志に

紅羅山在儋平縣東南一百四十里大程柵灣港口一名紅螺山爲一方關隘相近有深坑山

とあり、其の地點は廣東省と福建省の界に接する海岸である。次に至元十四年の正月には惠州府の甲子門に移つた、廣東新語に

甲子門距海豐二百五十里爲甲子港口有石六十應甲子之數又有奇石十八屹立如人（中略）景炎元年端宗航海而至厓山

良臣給軍食三日留帝像登瀛石上今石中像端然臨者帝也跪而進食者良臣也

とある、時日に就いては景炎元年末と二年の正月（厓山志）との兩說があるが、自分には其の眞僞が分らぬ。位置は海豐からは東南直徑約百五十淸里に當るが、寧ろ惠州府と潮州府の境界に接したところの小灣と云つた方が分り易い。

同年二月には新安縣の梅蔚に移り同四月には同縣の官富場に移つた、此の地點に就いて頗る疑點がある。讀史方輿紀要の新安縣の部に

海蔚山在縣南百里大海中行朝錄宋景炎二年正月南狩幸此今有石殿遺趾又西南八十里大海中有官富山山之東有官富場行朝錄景炎二年四月帝舟次於官富場是也舊志官富山在東莞縣西南二百八十里

とあれば、梅蔚も官富場も共に是非とも廣東灣口の島でなければならぬ、又西南は東南の誤でなければならぬ、然るに廣東新語には

官富山在新安急水門東佛堂門西宋景炎中御舟駐其下建有行宮其前爲大奚山林木蔽天人跡罕至多宋忠臣義士所葬又其前有山曰梅蔚亦有行宮其西爲大虎頭門張太尉奉帝保秀山卽此秀山之東有山在亦灣之前爲零丁山

又大淸一統志には

梅蔚山在新安縣西南一百里林木叢生前護縣治後障東洋宋景炎二年帝南狩至此有石殿遺趾

官富山在新安縣東南七十里又東十里有馬鞍山脈皆出自大帽屛障東洋大奚山在新安縣南一名大漁山輿地紀勝在東莞縣海中有三十六嶼（中略）舊志大奚山在新安縣南百餘里周二百餘里爲急水佛堂二門之障又有老萬山在大奚西南大洋中其周廣過於大奚

斯く記載が區々一致しないのみならず極めて不得要領であるので、確實なる推定を試み難いが、こゝに最も確實なる捉へ處は卽ち急水門と佛堂門とである。これは香港島と大陸との間の狹い海灣の口で、東が佛堂門、西が急水門である、官富山が此の兩門の間にありと云ひ、大奚山が周圍二百里の大島で、此の兩門の障をなすと云へば、大奚山は今の香港島であり、官富山は其の對岸でなければならぬ。吳汝倫が題字を書いてゐる大淸全地圖には、香港の對岸九龍の東數里の地點に官富と云ふ地名が記入してあるが眞に近いと思ふ。香港の西に隣る今の大嶼山は其の大さ大奚山に過ぐると云ふ老萬山でなければならぬ、此の島の西南に二三の小島がある、大淸全地圖に此の部分に梅蔚と記入してある、或は梅蔚は大嶼山の西部を云ふのであらう。卽ち以上の諸記錄と對照して甚しい矛盾は無い、卽ち大淸全地圖の記入がほゞ正しいと思はれる。端宗は同年六月には古塔に移り九月には淺灣に移つたと云ふが、此の地點は少しも分らぬが、勿論廣東灣の外に出づることは無い筈である。其の他石門、海珠寺などの戰場の位置もまだよく分らぬ、但だ淺灣は香山縣に屬する地點と考へられる、同十一月元將劉深が淺灣を攻めたので帝は秀山に避難した、秀山は東莞縣の南、珠江の口に當る虎頭門であると云ふことであるが、廣東新語によれば梅蔚の西に當り、伶丁山の西にも當る、卽ち香山縣の方に當ることになるが、自分は孰れが是なるを知らぬ。帝はそれより更に走つて井澳に逃れた、井澳は今の澳門の南にある橫琴山と云ふ島である。大淸一

統志に

横琴山在香山縣南二百里（中略）其地下有井澳亦名仙女澳宋史瀛國公記景炎二年帝舟入海至仙女澳風颶舟敗幾溺又馬南寶起兵井澳卽此

とある。卽ち宋軍は井澳で颶風に遭ひ殆ど全軍覆滅せんとせるとき、劉深の襲撃を受けて謝女峽にに奔り七星洋を越えて占城に往かんとしたが果さず、終に再び謝女峽に引き返し翌年二月廣州に還り更に碙州に駐蹕した。此の謝女峽は讀史方輿紀要香山縣の部に

謝女峽一名仙女澳亦在縣境

とある。然るに一統志には井澳亦名仙女澳とあれば結局井澳と謝女峽とは同地點となる。これは恐らくは共に横琴山の中であらう、横琴山も周圍我が七八里に近い可なりの大島であるから兩處は同島内若干の距離に在ると見て差支ない。さて次の問題は碙州である。一般に碙州は高州府吳川縣南十五里の碙州に比定されてゐる。これは今の佛領廣州灣の入口の島である。卽ち端宗は占城に走らんとして、海南島の東北角なる七洲洋又七星洋まで逃げたが終に引き返して碙州に駐まつたと解釋するのであるが、他の異說はこれに反し、端宗のこれ迄の行動を見るに、皆香山、東莞、新安の諸縣内卽ち廣東灣内に於ける小活動であるのに一躍して占城に走らんとすると云ふことが既に疑はしい、惟ふに七星洋は九星洋九洲洋の誤であらう、九洲洋は香山縣に屬し廣東灣口西部にある。又碙州は東莞縣の大奚山である。吳萊の南海人物古蹟記に大奚山在東莞縣一日碙州とあり、又陳中微の二王本末には、碙州は廣の東莞縣に屬し、州治とたゞ一水を隔てて相對すると云つてゐると云ふ。勿論此の東莞縣の大奚山は、さきの香港島に比定されたる新安縣の大奚山と同じでなければならぬ。新安縣は明の萬曆元年に始めて分置されたので、其の以前は香港地方も東莞縣の版圖であつたのである。陳中微は二王の海上に從ひ時事を目擊したのであるから、其の說は最も信憑するに足るものである。又吳萊は元人で其の粤に遊んだのは宋の滅亡を距ること遠からぬ時であるから、其の說も亦確實であると考へられる。卽ち碙州は案外にも實は今日の香港島であると云ふ結論に到達し得ると思ふ。

其の二　厓山の經營

元の至元十五年四月端宗は重なる辛苦に病を得て碙州に悶死した張世傑等は、其の弟なる昺を立てて帝となし年號を祥興と改めた、六月張世傑は獻策して厓山に移り、こゝを根據地としたのである。通鑑緝覽に

厓山在鉅海中與奇石山相對如兩扉潮汐之所出入也故有鎭戍張世傑以爲天險可扼以自固乃奉其主昺移駐遣人入山伐木造行宮軍屋數十餘間行宮正殿曰慈元楊太后居之時官民兵尙二十餘萬多居於舟資糧取辦於廣右諸郡海外四州復刷人匠造舟楫器仗至十月始罷

とある。實際厓山は天嶮の地であり薪水の便もあり耕作すべき平野もあるから、張世傑が此の地點を選んだのは甚だ機宜に適したことである。但し官民兵二十餘萬と云ふは如何にも誇大である。あの狹い厓山の平地に二十萬の人は居るに堪へない、又二十萬の民衆を養ふ丈けの餘裕は無い筈である。先づ二千人位と見て宜しからうと思

ふ。行宮なども極めて粗末な半永久的のものであり、兵舍の如きは眞の荒屋であつたに相違ない。兎に角六月に起工して十月に竣成したので、四ケ月の工事であるを以て見ても、如何に其の粗略であつたかを推知するに足ると思ふ。

玆に自分の甚だ了解に苦しむことは、張世傑が何故に厓門を閉塞しなかつたかと云ふ問題である。或は兵力が少くて閉塞し切れないのであつたかも知れぬ、併し讀史方輿紀要に

或謂世傑曰北兵以舟師塞海口則我不能進退盍往據之幸而勝國之福也不勝猶可西走世傑爲必死計不聽結大舶千餘作一字陣碇水中以拒元

とある。斯く厓門封鎖の適切なる獻策を卻けて、却つて自ら死地に就くと云ふは何の見る處があつたのか、又戰艦を連結して一字陣を作ることは、風浪に對しては便宜ならんも、海戰に際して臨機操縱の爲めには不都合であらうと思ふ。部下の者がこれ曹操が赤壁に於ける陣法に非ずやとて痛心したと云ふは無理ならぬことと思ふ。

此の間に於いて文天祥は海豐縣城の北二里なる五坡岑にて敵に捕へられ、廣州は李恒に占領せられ、宋の運命は日一日に迫りつゝある。其の滅亡は唯だ時間の問題である。支那全土今や悉く元に歸して唯殆ど厓山の一點地を遺すのみである。

其の三　張弘範對張世傑の海戰

元の至元十六年（南宋の祥興三年、我が弘安二年）正月庚戌の日に張弘範は潮陽を出發して厓山に向ひ、壬戌の日に厓山に著したのであるから十二日を費してゐる、此の里程約二百五十浬であるから一日平均二十浬を航した事になる。始め張弘範は惠州の甲子門で宋の斥候を捕へて帝昺の厓山に據ることを知つたので、先づ北から襲撃せんと欲したが水淺くして通じない、即ち厓山島の東に沿うて南に進み、轉じて西に向つて厓門に入り、宋の陣營と相對して水陣を布いたのである。

（經世大典）初弘範至甲子門獲宋斥候劉青顧凱知帝棲於厓山之西山南北亘二百餘里東南枕海西北皆港弘範至山北水淺不通乃由山東南又西與帝遇帝建宮山麓綦綺臣艦千餘艘下碇海中艤而外軸大索貫之爲柵以自固四圍樓櫓如城弘範潛舟載騎兵登麓焚其宮（廣州府志）

張弘範は竊かに舟に騎兵を載せて上陸せしめ、行宮兵舍等を焚かしめたとあるが、宋史によれば張世傑敵の襲來を見て自ら火を行宮に放ち、官民共に悉くこれを船に收容したとある。經世大典によれば宋軍は毎日上陸して薪水を採つてゐたが、弘範は其の道を遮斷したので宋軍大いに苦んだ。

（經世大典）帝以鬪艦號快船者樵汲弘範命樂總官山寨斷其汲路恒以拔都船當之帝遣兵爭之皆敗去自是樵汲日梗宏範又命樂總管自寨以礮擊帝艦艦堅不動（廣州府志）

宋史によれば宋兵渴に苦しみ海水を掬んだが、味鹹にして飲めば即ち嘔泄し非常に艱難に陷つたと云ふ。宋兵は既に殆ど戰鬪力を失つてゐたものと思はれる位である、恰も李恒は弘範に後るゝこと八日にして厓山に著し元軍は益々振つたのである。

（經世大典）有烏蛋船千艘救帝艤於北弘範笑曰此徒取死耳夜擇小舟由港西潛列烏蛋船北徹其兩岸且以戰艦衝之烏蛋船白屬海民素不知戰帝又不敢援進退無據攻殺殿遣弘範因取烏蛋船載草灌油乘風縱火欲焚帝艦預以泥塗艦懸水筒無數火船牽鉤南沃之竟莫能燬（廣州府志）

此の時烏蛋即ち水上生活を營んでゐる蠻民が千艘の船を以て宋軍に加勢したが唯一擊にして元軍に破られた、宋軍は唯傍觀してこれを救はなかつたのは必ず救援するの餘地が無かつたのであらう。弘範は烏蛋の船を利用して火船となし宋軍を燒かんとしたが効を奏しなかつた。斯くて兩軍相對してはか〴〵しい戰も無かつた、時々宋から戰を挑んだが皆敗れたので、張世傑は守勢一方で容易に埒が明かぬ、張弘範は如何にもして張世傑を降らしめんと考へ、折よく張世傑の甥が弘範の手下に在つたので、これを使として世傑に降を勸めたが世傑の一喝に逢うて逃げて歸つた。弘範は更に手を換へて、兼てより捕へ置きたる文天祥に勸降の書を書かせようとした。天祥固辭したれども許されず、由つて曾て過ぐるところの伶丁洋の詩を書いた處が、弘範笑つて其の儘にして置いたと云ふが、此の物語の眞僞は自分はよく分らぬのである。

其の四　南宋最後の日

張弘範は空しく宋軍と相對して日を送る内に宋軍が機を見て遁逃せんことを恐れ、一擧してこれを全滅すべき策略を勘へつゝ時機の熟するを俟つてゐた。二月癸未の日は弘範が厓山に到著してより第二十二日目に當るが、此の前夜より天候險惡ならんとする徵が見えた、弘範は此の機を逸すべからずとし、全軍を分つて四軍を編制し、李恒は北及び西北角に陣し、他の諸將は南と西とに陣し、張弘範は自ら西南角に陣した。宋軍は陸地を背にし西に向ひ整列してゐたらしい。即ち元軍は半圓形に宋軍を包圍したので此の兩軍の距離は約一里許りとあるから我が五六町に過ぎない、以て如何に宋軍の窘窮したかを推知することが出來る。弘範は潮の干滿を察し諸軍に令して曰く、「午前潮の南に退く時北軍は潮に乘じて敵を擊て、午後潮の北に流るゝ時南軍は潮に乘じて敵を突け、南軍中に皷樂の起るを聞かば北軍は取つて返して敵を攻めよ」と。斯くして此日の黎明煙霧濛々たる間に元軍の配置は悉く備はつたのである。宋軍は宛然袋の中の鼠の如き境遇に陷つたのであつた。

午前潮の南に退くに乘じて李恒は先づ北より宋軍に突擊を加へた、戰は主として礮と矢との交換であつた、張世傑の此の際の奮鬪の有樣は、

彼以江淮勁卒各殊死鬪矢石蔽空至巳時奪三船（經世大典）

と云ふ位で、李恒の軍が負け色になつてゐる、併し李恒は必ずしも必勝を期して戰つたのではなく、先づ敵を疲らす爲めにこれを挑んだのであるから宜い加減にして退いたものと思はれる。

（經世大典）日午潮水長北流南軍復順水勢進攻世傑腹背受敵以火礮禦南面軍（廣州府志）

正午の頃から潮は次第に北流して來る、弘範は舟の四方に布障を周らし楯を伏せ其の内で皷樂を作した、宋軍は元兵が宴樂を催してゐると思つて油斷してゐる隙に乘じ、宋將左大の陣に突入した、左大は矢を放つこと雨の如くであるが何の効もない、弘範は敵の矢の盡くるを見計らひ布障を去り楯を撤し猛烈に礮と矢とを發して攻め

かゝつた、北軍は南軍の中に樂の起るを聞いて再び引き返して宋軍を擊つた、南軍の樂が手に取る如く北軍に聞えたとすれば南北兩軍の距離も大抵は推知されるので、其の內に包圍されたる宋軍の數も案外に少かつたことが推知される。世傑は腹背敵を受け非常な苦戰に陷つた。

（經世大典）自巳至申聲震天地（廣州府志）

と云ふは强ち誇大の形容でも無いかも知れぬ。宋軍に取つては今日を限りの奮戰であるから隨分激しく抵抗したものと見える、併し勿論衆寡敵せず到底勝算なきを看取した張世傑は、舟を連結した索を切り放ち各自隨意の行動を取ることにした。然るに帝昺の乘船は殊に大きく、多くの小舟が纏ひ附いてゐて操縱意の如くならず、敵は已に咫尺に迫つて來たので、陸秀夫は先づ已の妻子を海に投じ、帝を負うて厓山の水に入つた。時に年四十四、帝昺は九歲であつた。諸臣及び婦女みなこれに殉じて海に投じ、宋軍はこゝに全滅したのである。

此の間にも世傑は流石に狼狽しなかつた。

（經世大典）開南壁率十六艦奪港門遁去恒與弘範等追至厓山口値天晚風雨驟至煙霧四塞將各相失弘範還恒獨進追之（廣州府志）

敗殘の十六艦を率ゐて重圍を破つて脫出したのは寔に天晴れの働きである。其の厓門を脫するや冥濛たる風雨の裡に激浪と鬪ひ、將卒を叱咤激勵して終に海洋に逸し去つた光景は古來稀れに見る悽慘なるものである。此のとき楊太后の行方は不明である、一般に太后は厓山に取殘された樣に記してあるが、又一本には世傑が太后を數うて逃げた樣にも書かれてゐる。

經世大典には焚溺の餘尙海艦八百餘艘と云ひ、甲申浮屍十餘萬とあるが、宋史には越えて七日浮屍十餘萬とある、八百餘艘は勿論誇大である、屍體が海戰の翌日卽、甲申に浮き上るは不自然である、これは數日の後に浮び出たに違ないが十餘萬は如何にも過大である、恐らくは數千に足らなかつたと思ふ、若し八百の戰艦と十餘萬の屍が浮かんだならば、厓山灣の水面は殆ど埋まつて仕舞ふ勘定となる。屍の中に一小兒あり晳衣黃衣を著し印鈒を帶びてゐる、印は詔書之寶と刻してある、取つてこれを弘範に獻じた者があつた。弘範は左右の者に問うて其の帝昺なることを知り、急に屍を求めたが得られない、李恒は屍を追うて高州の沖に至り、終にこれを得たと云ふことである。

張弘範は少日厓山に在つて軍を整へ、厓山の陽に厓を磨し功を記して京へ引き上げたのである。

其の五　張世傑の末路

それより幾何日を經て世傑は再び悄然として厓山に歸つて來た、荒凉たる古戰場を見て感慨無量であつたであらう。宋史によれば世傑はこゝで楊太后に邂逅したと云ふ。然らば太后は暫く何處かに身を隱して居られたことになるが、如何にして身を逃れたか寧ろ不可思議である。又世傑に逢つて帝昺の死を聞き慟哭して「我忍死艱關至此者正爲趙氏一塊肉耳今無望」と云ひ、水に赴いて死なれたと云ふも不自然である、寧ろ世傑に救はれて一旦海洋に奔り、再び世傑と共に厓山に歸り來て始めて帝昺の死を聞いて慟哭したと云ふ方が自然である。兎に角楊

太后は此の時海に投身せられた、世傑は斷腸の思ひでこれを海濱に葬つたが其の場所は不明である、多分海戰場の附近であらうと思ふ。

張世傑は厓山に於いて殘兵を集め安南に赴いて事を成さんと企てた、五月四日に船が南恩の平章口即ち今の陽江縣の沖にさしかゝつた時颶風が起つた。舟人舟を艤せんことを勸めたが世傑聽かず、終に溺死を遂げた顚末は左の一節に詳かである。

（厓山志）世傑將之安南五月四日舟抵南恩之平章港口颶風大作舟人欲艤舟世傑曰無以爲也爲我取瓣香來至則仰天祝曰吾爲趙氏亦已至矣一君亡復立一君今又亡矣我未死者庶幾彼退別求趙氏立之以存宗祀耳今若此天意果何如耶若天不欲吾復趙氏則大風覆吾舟舟遂覆世傑溺焉諸將求得屍焚之葬陽江縣潮居里赤坎村（廣州府志）

世傑も此に至つて終に根氣が盡きて聊か自暴自棄の溺死を遂げたものと見える。併し假令彼安南に奔るとも到底宋の天下を恢復することは出來ない、空しく異鄉の土となるよりも宋の鬼となつた方が本望であると覺悟したのであらうが、大いに同情すべき事だと思ふ。文天祥も實に根氣强い人であつた、五坡岭で生捕られるとき腦子を服して自殺せんとして成らず、敵に捕へられて有らゆる凌辱を受け南宋の滅亡を眼前に見せられつゝ辛抱してゐた。併し京に護送せらるゝ途中食を斷つて自殺を企てたが八日にして死に切れず、乃ち復た食ふとは何事であるか。若しそれ陸秀夫は純乎たる君子である、宋末落魄の極に達し其の日の生活にも事缺きたるとき、なほ衣冠を正して禮節を保ち、舟中幼帝の爲めに大學を講ずるに至つては到底常人の行爲にあらず。宋末斯くの如き幾多の忠臣義士は有つたであらうが、惜しい哉唯一人の大經綸家が居らなかつた、假令之有つても實際如何ともすることが出來なかつたのである。併し宋史にこれを評して

宋之亡微已非一日曆數有歸眞主御世而宋之遺臣區區奉二王爲海上之謀可謂不知天命也然人臣忠於所事而至此斯其亦可悲也矣

と云ふが如きは餘りに冷酷である、勿論宋史は元の脫々等の編纂であるからであるが、頗る同情なき評論であると思ふ。

結尾

以上、自分は先づ厓山の地點地形故蹟を實査し、而して厓山海戰の傳記を調査してこれを對照した見た處が、大體に於いて誠によく符合してゐることを觀たのである。若し自分の推察が大なる誤なしとすれば、亦以て支那歷史地理學上何等かの參考資料となすに足るであらうか。唯恨むらくは自分は史學の門外漢で、當時の正確精細なる記錄を得るの道を知らないのと、實地踏査に不備な點があるとに由つて、玆に斯くの如き粗笨なる講話を試むるの止むを得ざることを、切に諸君の高諒を希ふのである。自分の厓山を訪問したのは明治四十二年の二月であつた、厓山の海戰も年こそ違へ矢張二月であつた。しかも其の日は天曇りて煙霧斷續一晴一陰時々驟雨を降らし、厓門出發の日は濃霧四塞咫尺を辨ぜぬ程であつた、これも南宋最後の日の天候に似てゐる。自分は是に於いてか

切に六百三十年前の南宋滅亡の光景を回想して感興に堪へなかつたのである。自分は尙ほ至元十六年の二月癸未の日が今の曆の何月何日に當るかを計算して見度い、又當日の潮の干滿の時間をも計算して見度い。尙ほそれからそれと調査して見度い條件が續出して來るのであるが、これ等は總て後日の問題として一と先づ玆に講話を終るのである。

（建築雜誌第三百二十二號所載）

匡山參

五臺山

五臺山

緒言

曩の日、本紙(時事新報)上に南海普陀山を紹介した時、普陀山は五臺山及び峩眉山と共に、所謂支那の三山として、名聲五岳の高きより高いことを吹聽した。今回は卽ち三山の第二なる五臺山の說明を致すのである。五臺山と云ふ名は隨分鳴響いてゐる、其の本家の五臺山から支那の各地、朝鮮、日本に傳來して、こゝかしこに五臺山の分店が出來て居る。日本では土佐の高知市の附近に五臺山竹林寺と云ふ著名な伽藍もある。支那では南京にもあり、西安の南方終南山の中にもあり、朝鮮には江原道江陵郡に有名なのがある。此の外、又澤山あるだらうと思ふ。元來峰が五に分れて聳えてゐる處から其の名を得たものであるが、分店の方には、明かに五峰の區分が無いのもある樣である。

今回玆に說明する五臺山は、卽ち支那の本家の五臺山である。それは山西省五臺縣に屬して居り、文殊出現の靈地として古代からやかましくもて囃されてゐる。日本の求法僧にも登山したものが少くない。慈覺大師なども西安へ行く途中に登山された。又釋成尋の登山は「參天台五臺山記」に委しく見えてゐる。此の成尋は參議藤佐理の子で、一條天皇の寛弘八年に生れ、年六十二にして後三條天皇の延久四年三月十五日、宋の神宗熙寧五年日

本を出發し天台山及び五臺山へ登山したのである。委細は紀行に詳かである。彼は西臺に五色の雲を見、東臺に圓光を見たが、圓光の中に萬の菩薩が現れた、南臺では、金色世界を見たと言ふ。彼は宋帝の優遇を蒙りて歸國を許されず。元豐四年（白河天皇永保元年）七十一歳にて寂した。帝は勅してこれを天臺山の國清寺に葬り、塔を建て題して日本善慧國師之塔と曰ふとある。斯くの如き顯著なる事蹟を遺したる成尋や、慈覺大師の登山した五臺山は如何なる名山で如何なる靈地であるか、これを紹介するのは强ち無益でないと思ふ。

其の一　五臺山の地理

支那山西省の東北、直隷省と界を接する邊に於いて、滹沱河の上流の南岸に并行し、東北より西南にかけて、凡そ我が三十里の間に亙れる峻岳の一脈がある、これが卽ち我が五臺山脈である、其の崢嶸嵯峨として湧くが如く沸くが如く、群峰高さを爭つて、天に向つて飛ばんと欲する勢は、實に物凄まじくも、また恐しい、實にや、一萬二千尺に出入する北清第一の此の高峰が古來靈驗著しき佛跡として尊崇されたのも、決して無理ではないのである。

此の山脈の東北端、卽ち山脈の起點に於て、五個の秀峰が恰も梅の葩の如くに一の漏斗狀の深い〳〵谷を取り圍んで聳えてゐる。併しこれは火山の噴火口ではない。これが卽ち我が五臺山で、其の位置に從つて、東臺、西臺、南臺、北臺、中臺と名づけられて居り、東西南北相距ること各直徑六七里、漏斗狀の谷の底には一の小なる市街がある。卽ち五臺山村で楊林街と稱し、臺懷鎭を置いて、こゝに巴總衙門がある。五臺山の重要なる堂塔伽藍はみな此の漏斗の底にあるのである。五臺以內の水は、皆楊林街の附近に集つて可なり大きい溪流となる、これを清水河と名ける。河は先づ南に下り、折れて西南に走つて滹沱河に入る。五臺以外の水は思ひ思ひに路を求めて、三々伍々相伴うて滹沱河に注流する。滹沱河は恰も君王の如き容儀を以て、遙に東北なる恒山に程を起し、西南に走りつゝ五臺山脈の裾を繞つて、轉じて東南に向つて清水河を併せ大行山脈を橫斷して直隷省に入り、千曲萬折、終に天津に於いて白河に合流するのである。さて此の五臺山は、本名を清涼山と云ふのである。それは此の山が、周歲堅氷の溶くることなく、夏もなほ雪を飛し曾つて炎暑の時が無いからである、又五臺山と名づくる所以は、山頂に樹林が無くて、恰も土壘を築きたる如くであるからである。此の一山のことを詳細に書いた「淸涼山志」と云ふ書物に、五臺山の偉觀を巧に叙してある。

其の一節に

雄據雁代、盤敷冀州、在四關之中、周五百餘里、左隣恒嶽、秀出千峰、右瞰滹沱、長流一帶、北凌紫塞、遏萬里之烟塵、南擁中原、爲大國之屛蔽、山之形勢、難以盡言、

とあるは、實際の寫實である。

五臺の五の數の因緣に就いても難しい理窟がある。卽ち大聖文殊菩薩の五智已に圓かに、五脈已に淨く、五部の眞祕を總べ、五陰の性源を洞る。故に首に五佛の冠を戴き、頂に五分の髻を分ち、五乘の要を運らし、五濁の災を淸むと云ふ意味であるさうである。

次に五臺の各個の說明を試みよう。

五臺山

（い）東　臺

東臺は楊林街の西北凡そ五里、其の頂は鰲の背の如く、周り凡そ半里ある。其の峰を望海峰と云ひ海拔凡そ一萬一千尺餘である。若し秋の日、雲收まり、氣澄めるとき、東を望めば遙かに鏡の如き光を認めるであらう。これが卽ち直隷灣の海面である。山の傾斜は東南に延くこと七里にして直隷省の界に入り、西北は三里餘にして、繁時縣の界に入る、山中に十四の靈跡があるさうである。

張　商　英

迢迢雲水陟峰巒、漸覺天低宇宙寬、東北分明觀大海、西南咫尺望長安、圓光化現珠千顆、聳日初昇火一團、風雨每從岩下起、那羅洞裏有龍幡。

（ろ）南　臺

南臺は楊林街の西南凡そ五里にあつて、他の四臺と全く隔離してゐる。其の頂は盆を覆ふ樣な形で周圍六町計り、其の峰を錦繡峰と云ひ海拔凡そ一萬一千尺である。峰には細草、雜花、恰も錦を布きたるが如くであるに由つて此の名を得たのである。山の傾斜は南に延くこと十里にして嶺巖寺に至る。山中に二十一の靈跡があるさうである。

張　商　英

披雲蹋雪上南臺、北望清涼眼豁開、一片烟霞籠紫府、萬年松徑鎖蒼苔、人遊靈境涉溪去、我訪眞容躋頂來、前後三三智者少、衲僧到此甚徘徊。

（は）西　臺

西臺は、楊林街の西北約四里、其の頂は掛月峰と云つて、平廣である。周圍は凡そ十二三町、海拔凡そ一萬尺で、五臺中尤も低い峰である。若し月が此の峰に墜つるときは、鏡を懸けたるが如くに見えるので、此の名を得たのである。山の斜面は西北に向つて走ること凡そ七里にして滹沱河に至る。山中に十七里の靈跡があるさうである。

張　商　英

寶臺高峻足穹蒼、獅子遺踪八水旁、五色雲中遊上界、九重天外看西方、三時雨灑龍宮冷、一夜風飄月桂香、土石尙能消罪障、何勞菩薩放神光。

（に）北　臺

北臺は楊林街の正北約五里、其の頂は平廣で、周圍は二十五町斗り、叶斗峰と名けられてゐる。卽ち五臺の最高峰で、海拔實に一萬二千尺、下より仰ぎ視れば、山嶺斗杓を摩するが如きに由つて、此の名を得たのである。山嶺は常に大風ありて人を吹くこと枯葉の如く、時に猛風、怒雷、宇宙溟濛たることがあると云ふ。嶺から東は海氣を望むべく、北は沙漠を眺むべく、人をして宇宙の廣大と我が身の微小とを思ひ比べて坐ろに悲凄の感に堪へざらしめる。山の斜面は北に走る事七里、滹沱河に達する、山中二十七の靈跡があるさうである。

張　商　英

北臺高峻碧崔嵬、多少遊人到便回、伯見目前生地獄、愁聞耳畔發風雷、七星每夜霑峰頂、六出長年積澗隈、若遇黑龍靈躁者、人間心念自然灰。

（ほ）中　臺

中臺は楊林街の西北約四里、西臺の西北約一里に在る。其の頂は平廣で周圍三十町計り、海拔一萬五百尺程である。山巔は翠靄空に浮ぶを以て翠巖峰と唱へる。「水經」に峨谷の水は中臺より出づとあるが、即ち其の通りで、峨水は今鷲河と通稱してゐるが、中臺から發流し西臺の下を通りて、滹沱河に注ぐのである。山中二十八の靈跡があるさうである。

張　商　英

中臺岌岌最堪觀、四面林峰擁翠巒、萬壑松聲心地響、數條山色骨毛寒、重重燕水東南澗、漠漠黃沙西北寬、總信文殊歸向者、大家高步白雲端。

其の二　五臺山の沿革

五臺山の緣起は、素より例によつて荒唐無稽であるが、試みにこれを紹介して置く。

曰く、漢の明帝の時、西域の沙門摩騰漢土に來り、慧眼を以て淸涼山を觀るに、これ乃ち文殊の化宇で、中に阿育王の佛舍利塔がある、由つて帝に奏して寺を建て、大孚靈鷲寺と名けた。これが即ち當山の濫觴であると云ひ傳へられてゐる。阿育王は本名阿輸迦王、漢譯して無憂王と云ふので釋迦滅後凡そ三百年中天竺の摩揭陀國に君臨して名君であつたことは、誰でも知つてゐることである。此の王能く鬼神を驅使して、八萬四千の舍利塔を造らしめ、これを閻浮に散布した。日本にも三つ飛んで來てゐる。支那には澤山落ちて來た中、此の五臺山へも一つ降つて來たと云ふ次第である。

後魏の孝文帝は佛敎の篤信家であつたが、大孚靈鷲寺を再建し十二院を置いた。今の顯通寺が當時の善住院、今の菩薩頂が當時の眞容院である。其の他は皆堙滅して傳はらない。

隋の開皇元年（我が敏達天皇十年）に詔を下して五頂に各寺を置いた。唐の太宗は深く五臺山を尊重した。其の結果、貞觀九年（我が舒明天皇七年）には、十ケ寺が建立せられた。則天武后も大いに當山を尊信し、長安二年（我が文武天皇大寶二年）には親ら五頂を歷遊せられた。肅宗の乾元元年（我が孝謙天皇天平寶字二年）には、詔して當山に一區の寺を建てられた。代宗の廣德元年（我が孝謙天皇天平寶字七年）には、文殊殿を修理し、瓦の代りに鑄銅を用ひ、又丈六鑄金の文殊像を造らしめた。德宗の貞元丙子（我が桓武天皇延曆十五年）には南天竺の烏茶國王が入朝したが、國王は親しく當山に登つて禮拜を行つた。烏茶國は今の前印度の東海岸、マハナヂ河口のオリッサ地方である。

宋の太宗の太平興國五年四月（我が圓融天皇天元三年）に、當山に一寺を直建し、七年八月成り、天平興國寺と名

けられた。眞宗の景德四年（我が一條天皇寛弘四年）には眞容院に勅して重閣を建て、其の中に文殊の像を安置したが、其の美麗あたりまばゆきばかりであつた。此の建物は奉眞閣と名けられた。

元世祖至元元年（我が龜山天皇文應元年）の詔勅で十二佛刹皆親しく葺き替へを命ぜられた。

成宗元貞二年（我が伏見天皇永仁四年）には、萬聖裕國寺を勅建された。英宗至治二年（我が後醍醐天皇元亨二年）には普門寺を建てられた。

明朝になりても當山は常に帝室の保護を受け、絶えず勅建又は重修があつた。就中、大塔院寺の塔は、萬曆己卯（我が正親町天皇天正七年）の勅建で、同壬午（我が正親町天皇天正十年）に成功した。これは支那第一流の大塔で實に雄大なものである。詳細は次章で述べることにする。五臺山は創立以來、斯くの如き經歷を以て今日に繼續して來た。其の宗派は古は華嚴宗であつたが。今日では喇嘛教に化して仕舞つた。聞くところによれば、一山臺内の寺の數は凡そ六十四ケ寺で、其の總本山は卽ち大顯通寺である。其の内純正の喇嘛教伽藍が十ケ寺ある。而して其の本山は菩薩頂であると云ふことである。勿論、喇嘛寺以外の佛寺も、皆著しく喇嘛の影響を受けてゐる。要するに、五臺山の今日の有樣は頗る振はない。少數の大寺を除くの外はみな荒廢に委せて顧みられない、住僧は生活問題にのみ汲々として、其れ以外には何等の信念もない、佛敎も末路に近づいて來たのである。

其の三　五臺山の寺院

五臺山の寺院は、これを臺内と臺外とに區別する。臺内とは五臺山間の漏斗の中で臺外とは漏斗の外である。其の數は、古は内外併せて三百であつたが、漸々消滅して近頃では臺内六十四、臺外三十六、合せて百ケ寺と云ふのであるが、實際百に充ちて居るや否や頗る疑はしい。便宜上漠然百ケ寺とするのであるかも知れない。併し、實際陽林街は寺院で埋められてゐるが如くであり、五臺の途中あちこちに堂宇、高塔寺が見える光景は、流石に支那第一の梵刹の本場である。次に其の重要なる四五の寺塔を紹介して置く。

（い）大顯通寺

これは前節に紹介した大孚靈鷲寺で、天竺の靈鷲山に似てゐるが故に、名けられたのである。後漢の明帝のとき、五臺山が開かれた第一著の寺で、後魏の孝文帝これを再建し、唐の太宗これを重修し、則天武后華嚴經を收めて大華嚴寺と稱した。清の太宗勅してこれを重建し今の大顯通寺の名を賜はつた。其の平面は第五九七圖に示す通り、東の門から境内に入るので、第一に水陸殿があり觀音を安置す。次に一對の碑亭があり、中には康熙十六年の御製の碑記がある。次に文殊殿があり、次に大殿がある。大殿の中には釋伽三尊を安置し、殿前には明の崇禎の永明寺重修の記を刻した碑がある。卽ち明代に永明寺と稱へた時があることが分る。其の次に無量殿があつて、中に無量壽佛が安置してある。其の次の千鉢殿の内には喇嘛的十一面千手の文殊の像がある。殿の後に壇があつて其の上に五個の小塔がある。これは五臺の頂にある塔の模型だと云ふことであるが、事實はこれに符合して居らない。此の小塔の形は

南臺　普通の寶塔形。

五臺山

西臺　⊕形の塔身を有する十三重の塔。

北臺　寶塔の身上に十三重塔を置き、上に二重寶塔を置きたるもの。

中臺　西臺のものと同形の塔身を三つ重ねて屋蓋を加へたるもの。

東臺　北臺に同じ。

次に銅殿がある。これは全部悉く銅を以て造つたものである。銅殿の後には、中央に後閣、左右に經藏がある。其の他鼓樓、鐘樓、以下堂舍が左右に相對して整列してゐる。此の寺の規模は五臺山第一位のもので、實に堂々たるものである。建築としての價値は實は餘り大なるものではない。

（ろ）大塔院寺

大顯通寺の南に接し、大寶塔を以て顯はれてゐる。これが即ち阿育王の佛舍利塔である。明の永樂五年、勅して大塔を重修し、始めて寺を建てた。萬曆七年に、大塔再建の大工事を起され、同十年七月に竣功したのが即ち今の大塔で、其の平面と立面とは、第五九八圖と第六一〇圖とでほゞ想像し得るであらう。其の規模の偉大なることは、實に驚歎の他はない。「清涼山志」に曰く、塔は鷲峰の前群山の中央に在り、基は黃泉に至る、高さ二十一丈、圍二十五丈、狀澡缾の如く、上は十三級、寶缾の高さ一丈六尺、鍍金して飾となす。覆盆の圍七丈一尺、吊るに垂帶を以てし、懸くるに金鈴を以てし、更に金銀寶玉等の佛像及び諸雜寶を造つて、其の中に安置す、云云と。これは現場の有樣と符合してゐる。即ち所謂西藏式、即ち喇嘛式の塔で、高さ二十一丈と云ふは、他に匹儔を見ない。其の巍々堂々たる風丰は眞に黃泉より蹶起して大地を劈き、雲に駕して漂渺九天に昇るが如き勢がある。若し七丈の傘蓋に懸りたる風鐸、鏘々として遙かに虛空に響くを聞かば、身生きながらにして、西方彌陀の淨土に在るかと思はれる。

此の寺には天王殿、大慈延壽寶殿、大藏經閣、鼓樓、鐘樓等が、例の如く配置せられてゐる。大塔は大慈延壽寶殿と大藏經閣との間にあるのである。

（は）大文殊寺（菩薩頂）

即ち眞容院である。唐の僧法靈と云ふ者自ら殿堂を建て、文殊の塑像を造つたので、眞容院の名を得たのである。明の永樂の初に、勅して再建し、大文殊寺と號した。今では菩薩頂と通稱し、喇嘛宗の本山となつてゐる。伽藍は牌樓、山門、鼓樓、鐘樓、天王殿、中殿、文殊殿等から成立つてゐるが建築、として別に特筆する程のことはない。

（に）慈福寺

清の嘉慶年間の創建にかゝる、新しい喇嘛寺で、西藏式の手法及び裝飾が用ひてある。天王殿、大殿、中殿、藏經樓が配置されてある。藏經樓には例の喇嘛式天地佛がある（第一二三六圖の（2）（3）參照）。

（ほ）羅睺寺

塔院寺の東北に在る。唐の創建で、明の成化年中趙惠王の重建と云ふ。弘治三年重修の碑もある。今喇嘛教に

屬し、天王殿、鼓樓、文殊殿、都綱殿（大殿）、後樓等例の如く配置されてある。

（へ）殊　像　寺

唐の神人の作と稱する文殊狻猊に騎る像があるので有名である。天王殿、鼓樓、鐘樓、大殿、經藏等があるが大殿の本尊は釋迦でなくて文殊である。

（と）南山極樂寺

これは四角な中庭の周圍に殿堂を配置した一種の伽藍で、庭の中央に一基の喇嘛塔が立つてゐる。入口の牲空門は事實上天王殿である。開基は唐代であると云ふ（第八〇八圖參照）。

此の外に、著しい伽藍も澤山あるが、要するに、大同小異であるから一々こゝに紹介する必要は無い。只だ此處に注意して置く事は、當山は文殊の靈地であるだけに、百の精舍悉くみな文殊を祀つてゐる。大伽藍には特別に文殊殿があり、小伽藍では、大殿の中に文殊を納れる。恰度、補陀山で各寺みな觀音を尊奉してゐると同じ關係である。補陀山には、元代の古建築が一つ遺つて居つたが、五臺山には明朝の型を失はない大塔一つあるだけで、其の他は皆清朝のものらしい。其の代り珍らしい西藏式、即ち喇嘛式の手法を多少知る事が出來る便益はある。

其の四　五臺登山順路

五臺登山は今日では少しも困難でなく少しも不便でない。若し北京から登山するならば、僅か五日にして、五臺山村に達する事が出來る。予は山西の大同府の方から間道を通つて登山したのであるから、相當の難儀をしたが、旅行の趣味は一層深かつた。道順は逆であるが、予の旅行の實驗談の一節を述べて見よう。

予は明治三十五年六月一日を以て北京を發し、順路張家口に至り、それより西南に轉じて山西省に入り大同府に達した。大同から五臺登山の順路は、先づ雁門を出で代州を經由するのであるが、これは大迂回の道である。予は即ち捷徑を取つて、大同から正南に向つて應州に至り、更に南に向つて茄越口と云ふところで萬里長城の復線を越え、一連の峻嶺に攀ぢ登つた。雁門は茄越口の西方凡そ十里にあつて同じく長城の關門である。

大同以南は即ち山西省の高原で海拔四千五百尺に出入し、桑乾河の支流に灌漑されたる一望百里の原野である。見渡す限り牧草籬々として、一の樹林も耕田も無い、百姓は莜麥と云ふ一種の雜草らしい穀物を唯一の食料としてゐるのである。原の上には處々に鹹湖がある。百姓はこれから鹽を製して用ひてゐる。小さき野獸、それを窺ふ鷙鳥、遠き山岳、近き村落、皆好畫題たらざるものは無い。

此の原野の盡くるところが即ち茄越口である。關門を越えて一條の無水の溪流の中を登つて行くのであるが、河床は亂石磊々として饗の河原の如く、兩岸は刄の如き磐石峙ちて劍の山にも似たり。登ること凡そ五里にして絶頂に達する。此の處海拔約八千尺、名けて鐵吉嶺と云ふのである。こゝから南を望めば、萬仞の谷を距てゝ五臺山が見上ぐる計りに屹立してゐる勢は實に物凄い、谷の底には滹沱河が絲の如く、繁時城は豆粒の如くにその傍に見える、驕て嶺を下り、或時は千仞の斷崖の上を危く渡り、或時は絶壁の急坂を轉ぶが如くに降り、繁時城に

著いて見れば、局面一變、滹沱河の流れは珠の如く清らかで潺湲として漣を起して流れ、流れには細魚躍り、汀には綠草茂り、楊柳列をなして路を夾み、平地には麥、白菜、瞿粟等が美しく作られてゐる。百姓の常食も最早蕎麥ではない、後魏が大同に都してゐた頃、皇帝が屢々繁畤へ行幸されたのは偶然ではない。

繁畤から西南に向つて進み滹沱河を渡れば、已に五臺山脈の麓である。鷺河と云ふ一大溪流を得て、これに沿うて上つて行く、途中花松や楊柳が澤山見えた。河の兩岸には狹い平地があつてよく耕作されてゐる。河に沿うていよ〳〵進めば、山岳ます〳〵高峻となり、水源を究め盡して分水嶺に達すれば、五臺の五峰は忽然として眼前に現れ出でたが、其の形相は兼ねて予の想像して居つた處とは全く相違して居つた。予は五峰劍の如く並び聳え、森々たる樹林を以て蔽はれてゐるものと心得て居つた。然るに、其の實際は全く正反對で、五峰は相距る事數里、山は寧ろ平廣にして傾斜緩やかに、樹林は僅かに谿間に散在してゐる計りで、滿山皆若草を以て掩はれてゐる。如何にも悠々として迫らざる大規模の大景色なるに感歎した。此の分水嶺上に獅子窩と云ふ道場があり、十三重の瑠琉瓦の塔が一基あるが、萬曆二十七年の建築である。嶺を東へ下ると一の古寺があり一基の五重塔がある。更に下ること若干程で、五臺の中心なる漏斗の底に達する。こゝには清水河が南に向つて一方の路を開いて奔下して行く。河を溯ること半里許で臺懷鎭に到り、次いで楊林街に著した。

予は大塔院寺に投宿し、臺内及び臺上の伽藍を歷訪した。實は五臺巡りを試みるはずであつたが、故あつて果さなかつた。只だ僅かに西臺と中臺とのみ巡歷した。楊林街から西北に向つて山路を登り、行程約三里半で西臺の絶頂に達したが、山巔の堂塔は皆崩れて佛像狼藉たる中に、大明洪武の碑が唯だ一基悄然として立つてゐる。それから東北約一里、峰傳ひに登つて中臺の絶頂に達して見ると、こゝには一基の喇嘛塔が完全に保存されて立つてゐる。これも明代の遺物である。聞けば南臺の頂にも一の塔が殘つてゐるが、東臺と北臺には已に何も無いと云ふことである。

中臺から五臺全體の舞臺がよく見える。西臺は咫尺の間に接近し、東北二里餘を距てゝ北臺が更に見上ぐる許に聳えて居り、東臺と南臺は遙かに殆ど自分と水平の位置に峙つてゐる。五臺の中の樹林、堂塔、牛馬、人影等は、歷々として辨ずることが出來る。實に世界稀有の偉觀である。

歸路は楊林街から清水河に沿うて南に下り石嘴に達し、こゝから東に折れて龍泉關を越え大行山脈を下つた。龍泉關は卽ち山西と直隷の省界で、萬里の長城の支線に當る。（石嘴から西に折れゝば五臺縣及び太原府に達するのである。）然るに、楊林街から龍泉關までは、事實上の平地で、關から東は一氣に直立約五千尺の絶壁の如き大行山の傾斜面を下つて、直隷の大平野に達するのである。予はこゝに於いて、始めて楊林街が海拔少くとも六千尺に達することと、果して五臺の高さが一萬尺に下らないことを確信した。

龍泉關を越えて大行山を下り終るところに龍泉關村がある。尙一溪を得て下ると阜平縣に達する。此の邊から山漸く退き、土地漸く闊く、田野の光景は全く一變して、稻もあれば、瞿粟もある、地味豐饒、村落相繼ぎ、始めて人界に降つた樣な心地である。それから曲陽縣を經由して定州へ出て、定州から蘆漢鐵道に由つて北京へ歸つた

のであつた。なほ土地の形勢村落の位置は、地圖（第一二三五圖參照）に附いて熟覽されんことを希望するのである。

其の五　五臺山雜觀

五臺山は土地が高い丈に氣候は却々涼しい。それで登山は六月中丈が適當であるが、七八月には時々雪が降る。予は六月二十八日に西臺と中臺とへ登つたが山上は氣澄み風寒く、涼爽云ふべからざる心地であつた。大塔院寺に泊つてゐたが、夜は火鉢を離れる事が出來なかつた。此の火鉢は純然たる日本式のもので、木の臺の中央へ丸い穴をあけて中へ眞鍮の火架子を落し込み、其の中には三脚子（五徳）と鐵筷子（火箸）火鏟子（灰ならし）等を備へて置くのである。參詣者は何れも宿坊があつて、それ〴〵寺の中に宿泊することは、丁度普陀山の如く、又日本の高野山等にも似てゐる。併し、坊主は比較的正直で、宿錢を貪るやうな事は無かつた。熱心な登山者は必ず五臺廻りをやる。それは峰傳ひに五臺を歴訪するので、山巓で一夜も二夜も明かすのである。不思議に支那には宗教熱心家がある。大官連中にも隨分ある。予が丁度雞睺寺を訪うた時、折柄蒙古の某郡王が幾多の奴婢を從へて、此の寺に宿泊して居つた。彼は清朝から有らゆる高貴の爵位を受け居り、頗る傲慢の態度であつた。併し彼等の登山は信仰の爲めよりは寧ろ避暑の爲めらしい。

楊林街は一寸體裁を得た小街で二三百戸はあり、各種の商舗が備つてゐるから、支那人には少しも不自由がない。「水滸傳」の花和尚魯智深が泥醉して騷ぎ廻つた古跡かと思ふと、一種滑稽な感想を起さざるを得ない。街には五臺土産とも云ふべき、佛像、佛畫を澤山賣つてゐる。何れも例の喇嘛教の天地佛、夜摩天なぞの像で、思ひ切つて劣惡なものである。佛像は皆人工古色を著けた青銅であるが、多少參考の材料にはなる。

五臺山の建物に古いものが無いと同樣に佛像、佛畫、佛具類なぞにも碌なものは無い。每家必ず文殊の像を安置してゐるが、皆生々しい金箔の光に掩はれて、製作や年代の程度は一寸分らない。併し西藏佛及び西藏製錫杖などに叫白いものがある、勿論日本人の眼から珍らしいと云ふに過ぎないかも知れぬが。西藏佛は引きしまつて凛々しい所がある。其の外には取り立てゝ云ふに足るものがない。滑稽なのは中臺の下の吉祥寺に文殊菩薩の齒と靴とがある、よく見ると齒は象の臭齒であつた。靴の長さは二尺許りある、此れは齒の大きさから割出して考案したものらしいが、何處にもよくある笑話である。

五臺山の坊主等は、信徒の淨財と、田地の收穫とで生活してゐるが、場末の小寺になると實に憫な有樣である。予は登山の歸途、金剛庫と云ふ所で一の廢寺を見た、門は倒れ堂は崩れて、雜草屋を埋めてゐる、何か獲物もがなと思つて這入つて見ると、一疋の痩狗がけたゝましく吠ゆると共に、此の世の人とも思はれぬ一人の老僧が、海藻の如き襤褸をまとうてよろめきながら出て來た。如何にして生活するかと問ふと、山の上を指して、彼處に少しばかりの畑がある、それを耕作して露の命を繋いでゐると云ふ。併し、大線通寺や、菩薩頂の總司（管長のやうなもの）なぞは却々贅澤を盡してゐる。

五臺山は深山であるだけに、動植物にも珍らしいものがあるやうである。猛獸には豹が最も多い。予は近頃銃殺されたと云ふ六尺に餘る大豹の剝製されて石嘴の關帝廟に奉納されたのを見た。

（明治四十五年二月　）

五　臺　山

南海普陀山

南海普陀山

緒言　支那の三大靈蹟

支那浙江省舟山群島中に普陀山といふ一孤島がある。普陀山即ち普陀洛迦、一名補陀、華嚴經には補怛洛迦と稱して居る。島の位置は、普陀山志といふ書に、今定海縣の東に在り、縣を距る百餘里、海中に孤峙す。蜿蜒綿亘、縱横各十里許り、周遭四十餘里或は百里と云ふ。南は閩粵に亘り、北は登萊に接し、東は日本を控へ、西は吳會に通じ、實に海中の巨障なり、とあるので大凡見當がつく。此の普陀山といふのは、所謂支那の三大靈蹟の一で、此の外に山西省五臺縣の五臺山、四川省峨眉縣の峨眉山、それを併せ稱して三山と云つて居る。五臺山は文殊の靈地、峨眉山は普賢の靈地、而して予がこゝに述べんとする普陀山は觀音の靈地である。五臺山は規模雄大、峨眉山は山嶽奇峭、普陀山は風景佳絶、其の他すべての點に於いて此の三山は支那名蹟の三幅對である。

其の一　僧慧鍔の開基

予は先年此の三大靈地を歷訪して少からず歷史的趣味を感じたのであるが、就中普陀山は、其の開基が遠い昔の日本の高僧であるの故を以て一層予の感興を惹いたのである。昔から、支那の高僧で我が國に渡來し、伽藍を

建立し、又はそれに關與したものは澤山ある。又我が國の高僧が支那へ渡り、歸朝後靈場を開いた者も澤山ある。併し我が國の高僧が支那へ渡り、其所に一山を開いたものは誠に少い。況んや其の山が、當今支那に於いて第一流の名蹟であるが如きに至つては實に稀有である。ところが、前述の普陀山卽ち補陀洛迦山は我が國の僧慧鍔の開基である。慧鍔は本朝醍醐天皇時代の名僧で、疾くより支那へ渡り延喜十六年（五代梁の貞明二年）五臺山から觀音の像を得て日本へ持ち歸らんとし、四明の阿育王寺や天童寺を歷訪して寧波（ニンポー）から舟に乘り、今の定海縣を過ぎて一孤島に差しかゝつた。其の時舟が俄かに止まつて動かず、慧鍔は合掌瞑目して、願はくは觀音菩薩の止まり給はむ所に精舍を建立せむ、と胸中に祈つた。すると間もなく舟が進行して其の島の一角に至つて停まつた。慧鍔はそこで忽ち舟を捨て、上陸して土人張氏の居宅へ靈像を安置し、これを不肯去觀音院と名けた。これが卽ち今日の普陀山の緣起である。ところがこれは支那の傳說である。

其の二　兩傳說の眞僞如何

翻つて日本の傳說を尋ねて見ると、元亨釋書といふ書の卷十六に、釋慧蕚は齊衡の初、橘太后の詔に應じて幣を齎して入唐し、登萊の界に著き、雁門に抵り、五臺に上り、漸く杭州の鹽官縣の靈池寺に屆り、齊安禪師に謁して橘后の聘を通じ、義空長老を得て而して歸る。又支那に入つて重ねて五臺に登り、適臺嶺に於いて觀世音の像を感ず。遂に大中十二年（我が朝文德天皇天安二年）を以て像を抱いて四明に道して本邦に歸る。舶、補陀の海濱を過ぎて石上に附著し進むを得ず、舟人載物の重きを思ひて屢々諸物を上ぐるも船著くこと元の如し。像出づるに及んで舶能く泛ぶ。蕚、像の此の地に止まるを度りて棄て去るに忍びず、哀慕して留まり、廬を海嶠に結んで以て像を奉ず、漸くにして寶坊と成し、補陀洛山寺と號す、今禪刹の名藍たり。蕚を以て開山祖と爲すと云ふ。

と記してある。これで見ると、以上の兩傳說は全然符合してをらぬ。殊に其の年代は、一は天安二年と云ひ、一は延喜十六年と云ふので丁度五十九年の相違がある。慧鍔と慧蕚との文字の相違もある。その何れが果して眞なるかは、予がこゝに輕々に論斷すべき限りではないが、兎も角も此の山が唐末頃に日本僧慧鍔、又は慧蕚なるものに依つて開かれたこと丈けは斷言して差支ないと思ふ。

其の三　實地踏査の結果

其の後星霜を經るに從つて、普陀山には張氏の後も分らず、不肯去觀音院の所在も分らず、肝心の觀音像さへ行方不明となつてゐるが、伽藍の發達は頗る著しく、終には全山盡く精舍を以て充さるゝに至つた。實地踏査の結果によれば、此の島は、普陀山志にある通り正しく定海縣の東に當り、海路二十五浬の所にある。寧波から行くと海路約七十五浬、土人の言によれば、定海から此の島までは、或は百里或は百二十里、或は百五十里といふが、こゝには假に二十浬を清里に換算して約八十清里として置く。順路は寧波から水路定海を經由するのであるが、季節には此の間を小蒸氣が通ひ、平時は寧波から定海までそれが通ふ。此の間五十浬、約六時間を費す。それから先は支那船で、定海普陀間順風なれば五六時間、逆風なれば一日を費す。さて普陀山の形は、予の觀測によれば、全長二十清里（以下單に里といふ）中央より曲折して幅は三四里に出入し、周圍は殆ど六七十里に亙る。

面積は凡そ我が一方里弱で、即ち伊豆の神津島程の大さに當る。島内には一連の山脈縱斷し、別に南端に一群の岡巒がある。普陀山志によると、其の最高峰が白華頂、これに續いて光熙峰、大小雪浪山、象王峰、梅岑峰、磨峰、正趣峰などが聳えてゐる。白華頂は島の北部にあつて、踏査して見ると高さ約一千尺許り、即ち房州の鋸山程の高さがある。光熙峰は白華峰の左にあり、一名石蓮花又は石屋ともいふ。錦屏山は光熙峰の左にあり、法雨寺の坐山である。雪浪山は白華頂の右にあり、峰が双つに分れて大小の名がついてゐる。青鼓山は此の山の東に在り、島の東端となつてゐる。白華頂の後方北から西に渡つて茶山あり、茶山と相連つて東北に伏龍山がある。又白華頂から一脈の連山南に走り、蟠て折れて西に向ひ觀音峰となり、磐陀山となり、次第に高さを減じて終に西端風洞嘴に至つて盡きる。今日では全島殆ど禿山で、僅かに灌木が茂つてゐるばかりであるが、所々の谿間には猶ほ多少の樹林があり、殊に茶山は鬱々として全山悉く樹林に蔽はれてゐる。住民は平素は五六百であるが、正月二月の參詣季節には僧俗併せて二千位になるさうである。

其の四　梵　刹

普陀山には二の大伽藍がある。一を普濟寺と云ひ、他を法雨寺と云ふ。

普濟寺は島の南部、靈鷲峰の下にある。其の沿革の大要は、宋の元豐三年に、寶陀觀音禪寺と云ふ名を賜はり、明の萬曆三十三年に勅建ありて、護國永壽普陀禪寺と云ふ額を賜はつた。然るに、清の康熙四年乙巳の夏、紅毛の寇に遭ひ、伽藍はみな燒毀されたが、獨り大殿だけは災を免れた。同二十八年、再建著手、三十八年『普濟群靈』の御題の額を賜はつたので、今の普濟寺と改名した。其の後、雍正九年、國帑を以て修繕を加へた。

伽藍の敷地は東西八十丈、南北六十丈と云ふことである。正面入口に牌樓があり次に五間の萬壽亭があり。次に池があり、其の中央に甬道を築いて、御碑亭を建ててある。次に左右に西山門、東山門があり、正面に山門がある。其の次に、天王殿がある。中には例の如く、喇嘛教的の四天王の巨像が安置されてある、東北は增長天で琵琶を彈じ、東南は持國天、左手に劍を把り、西北は廣目天で、右に傘を持ち、左に鼠を握し、西南は多聞天で左に蛇を掴し、右に珠を抓んでゐる。中央正面には、布袋の相なる彌勒を置き、これと背合はせに韋駄天の立像がある。

天王殿の次に、高い壇の上に、大圓通殿があり、殿前に石の五具足が陳列されてある。此の殿は、普通の場合には大雄寶殿で、釋迦を本尊とする筈の處であるが、普陀山であるから觀音の巨像が本尊となつてゐる。大圓通殿の後に、高い壇の上に藏經樓があり、其の下が法堂となり、上が經藏となつてゐる、此の後には方丈がある。

以上は中央の線内に排列された堂宇であるが、其の左右に、數々の堂舍がある。山門の内には、鼓樓、鐘樓が左右に聳え、天王殿内には、左に崇德殿、祖師殿、羅漢殿、右に功德殿、伽藍殿、羅漢殿が後方に接續して竝び、大圓通殿と左右羅漢殿との中間に、左に關帝殿、右に靈應殿がある。藏經閣の左右には、雲水堂、客堂が相對立してゐる。

此の外、雜舍が澤山ある。併し要するに伽藍の各宇は、建築としては何等の價値もない、只だ康熙以前の式を

存すと稱する大圓通殿は、やゝ見るべきものである。

法雨禪寺は白華頂の左、光熙峰の下にある。明の萬曆八年の創建で、同三十四年に『鎮海禪寺』の額を賜はる。康熙四年の難に、一山みな燬滅に歸し、同二十八年から三十八年に再建されたとき『天花法雨』の御書の額を賜はつたので、今の法雨寺の名が起つたのである。伽藍の大きさは間口六十九丈、奥行六十二丈五尺である。堂宇の配置は殆ど普濟寺と同じである。即ち先づ池を渡つて碑亭を過ぎ左に折れて門に入れば、牌樓がある。次に天王殿、御碑亭、大圓通殿、御碑亭、上大殿（法堂）、藏經樓が順に整列し、天王殿内、左右に龍王殿と伽藍殿、鼓樓と鐘樓、共に相對峙してゐる。大圓通殿の左右に水月樓と松風閣、客堂と厨房、各相對立してゐる。上大殿の左右に戒堂と禪堂、庫房と功德堂、何れも相對してゐる。上大殿と庫房の間に關帝殿がある。藏經樓の右に祖堂、左に方丈がある。方丈の左に珠寶殿、又其の左に老方丈がある。これが重なる堂宇の配置である。

要するに、兩刹殆ど同　の體裁で、日本の禪刹と類似の點が見える、殊に普濟寺と京都府宇治の黄檗山萬福寺伽藍とは餘程よく似てゐるのである、勿論、兩寺の堂宇の建築は、技術上別に觀るに足るものではない。

普濟寺　　金土奎

疊石長橋架水平。紅門深閉木魚聲。巍宮特創三摩地。古刹同登四大名。不是當年傳普濟。何能此日起群誠。

煙霞館上無塵到。入步先知佛敎清。

法雨寺

漫說當前一寺紅。凌雲樓閣兩相同。九龍殿已偕山老。五鳳門尤對海雄。佛古尙能施法雨。僧勒竟少出家風。

廊廻檻繞疑無路。只聽鐘聲打半空。

其の五　精藍・塔婆・墳墓

一山の靜宇田庵、其の數は二百に餘ると云ふことである。自分が訪問したもの許りでも、三十程ある。これを一々書き連ねた處で、只だ煩しい許りであるから、玆には著しい四五ヶ所丈けを擧るのである。

樹林鬱蒼たる茶山に、慧濟寺と云ふがある。明僧圓慧の建立で、天王殿、大雄寶殿など、いかめしく并び建つてゐるが、建築は尤も卑俗のものである。それから南に下つて、千步沙に沿うて、數々の庵があるが、何れも特記する程のものでない、朝陽洞を左に見て、一の峠を越え、進むこと少し許りにて、右の山手に登れば、此處に法華洞がある。『普陀山志』に「方圓鉅石自相累架、如人工結構者」とあるが、實に其の通り、誠に一山の奇觀である。なほ南に下つて普濟寺の東を過ぎ行けば、太子塔がある。普陀第一の石塔で、其の形式も亦頗る奇巧なものである。普陀山志に據れば、「元の元統中（後醍醐天皇元弘三年より建武元年の間）諸王宣讓なるもの、鈔千錠を施して、住持孚中禪師の爲めに建立したので、高九丈六尺、俱に太湖美石を用ひ、製造堅固、雕琢精巧、凡て五層四面各々佛相を安んず、變化一ならず、瑞容妙麗、眉目顧盼生くるが如し、旁欄柱端俱に守護天神獅子蓮花を刻す、工巧を極め生動す、今に至つて苔蘚生ぜず」とある。如何にも美事な塔であるが、實際三重四角で、二重の壇の上に建ち、相輪は欠けてゐる。その他は此の記事と符合してゐる。恐らくは、元代の遺物であるかとも思は

れる。然らば、此の塔は普陀山第一の古建築で、支那全國にも稀に見る好遺物である。

更らに南に普同塔がある。これは一山無縁の者を合葬した墳墓で、近代の製作であるが、其の意匠は頗る見るべきものである。

普濟寺の西磐陀庵は、規模の大なるものに屬する。これから北に向つて山に登り、西に進めば、梅福院、靈石禪林等がある。靈石禪林の中には磐陀石がある、これは長二十五尺、幅十五尺、高十尺の大石が、只だ一點に支へられて、巨岩の上に危く立つてゐるので有名である。昔、觀音菩薩此處に現身して、說法したと傳へられてゐる。

こゝから西南に下れば、大佛頭がある。摩崖に大佛の頭を刻り出したものであるが、恐るべき悪作である。なほ下れば觀音古洞がある。これは人工を加へたる洞窟の中に佛像を刻み出したもので、其の製作の古拙と云ひ、洞の形の工合と云ひ、如何にも古代のものらしく見える。或は一山開基の遺物かとも思はれる。此の外の精藍等の記事は、一切省略する。なほ地圖に據つて、それ等の名稱と所在地とを點檢せられんことを希望する。

其の六　名　勝

普陀山の形勝は、實に支那に冠たるものであらうと思ふ。東は茫々たる大海を望み、西、北、南の三面には、點々碁布の群島を繞らし、山は高からねども秀で、水は長からねども清く、或は平砂十里、或は斷崖千尺、怒れる激浪、驚ける巨巖、洵に南海の仙境である（第一二〇七圖參照）。古來普陀山十二景と云ふものがある、それは左の如くである（但一ヶ所は不詳）。

梅灣春曉　茶山夙霧　古洞潮音　龜潭寒碧　天門清梵　千步金沙
蓮洋午渡　香爐翠靄　洛迦燈火　靜室茶煙　磐陀曉日

たゞし舊志には短姑道頭、不肯去院、太子塔の三條のみ載せられてあると云ふことである。今の十二景は近頃のものと見える。次に自分の尤も趣味を感じたる二三の場所を紹介したいと思ふ。

（一）新羅礁は、西南の大洋中、石牛港口に在る。即ち日本僧慧鍔の船が坐礁に及んで佛に禱つた處だと傳へられてゐる。勿論往つて觀たのでは無いが、名を聞いた丈でも興味が生ずる。

（二）潮音洞は、嶋の東南にある。即ち慧鍔の船が安著した處だと云ひ、又大士現身の處だと云ふ。怒濤と怪巖と、四六時中絶えず奮鬪する有樣の凄じさ、何時まで觀ても觀飽かぬ壯觀である。洞の附近に紫竹林がある。こゝの岩石に、海草の形が黑く印せられて自ら斑紋をなすのは面白い、嶋では、これを紫斑石と稱してゐる。

陳　王　賓

層巒廻曲徑、石竅瞰長虹、大士棲霞所、龍神聽法宮、水梳瑤草滑、風掃白雲空、悟入三摩地、蕭然興味同。

（三）千步沙は、嶋の東岸で、一望數里、白沙弓の如く、寄せてはかへす浪も穩かで、如何にも長閑な景色で

ある。

月中走千步沙
千步堪留月、祥光散碧霞、遠看金布地、近泛浪成花、水氣雲飛絮、波聲雷駕車、慈航如可渡、此夜擬乘槎。

（四）菩薩頂は、嶋の最高峰で、今はこゝに燈臺が建てられてある。瞰下せば、普陀の孤嶋脚下を繞り、見渡せば、八重の潮路遠く空に連なる。

九日登菩薩頂得東字　釋常譽
絶頂雲深處、登臨興倍雄、水明天際碧、霜薄樹頭紅、萬慮一身外、千山四望中、天花容我住、歸國下山東。

（五）磐陀石は、前章に述べた通りの靈地で、殆ど絶壁の上に建ち、樹林の間から海洋を瞰下する風景、また捨て難い處がある。此の附近に二つの巨石がある、一は俯龜に似、一は仰龜に似てゐるも妙である。

見說磐陀著地靈、普門會此坐談經、二龜何事飜成石、想是當年不解聽　何辰生

其の七　雜件（旅行の注意）

普陀山に遊ぶ者は、二三月の頃、小蒸汽の通ふ季節を聞き定めて、これを利用するが宜しい。上海を夕刻に出發すれば、寧波、定海を經て、翌日の夕刻には普陀山に著くことが出來る。嶋内には勿論旅館はない、全嶋みなこれ伽藍精舍で、僅かに普濟寺の東に數十戸の商店がある許りである。即ち精舍は同時に旅館であり、各坊みな多少の宿泊の設備を整へて參詣者を待つてゐることは、丁度我が高野山の如きものである。故に、僧等は同時にまた逆旅の主人で、巧に客を待遇し、相當の喜捨を受けて生活の資としてゐる。併し蜀の峨眉山の樣に、本堂の柱へ「飯一婉何文」「宿錢何文」などと貼紙する樣な、露骨な天眞爛漫なことは爲ない、多年多數の外國人から法外な金錢を貰ふ習慣があるから、旅客も其の積りで、覺悟して往かなければならない。其の代り、宿泊の設備は充分に整つてゐて美しい（勿論比較的に）、癒臺に清淨な毛布洗面器等を備へ、夜は大きな空氣ランプ位を供給して呉れる、見物に出かける時には、住僧自ら案内者として、一種の輕便な竹製の轎子に乘せて、名勝を歷訪させて呉れる。故に旅客は何等の旅行準備もなしに行つても大した差支はない。只だ食事は一切精進料理であるが、これも仲々美味である。序でに、宿賃等の標準も話して置くが、若し一泊して各名勝地を案内して貰へば、住僧に五圓、料理人に貳圓、給仕に一圓、轎夫二人に二圓、合せて十圓位を拂つて來なければならぬ、若し通譯者を連れて行けば、此の五割增位で宜しいのである。兎に角、比較的不廉な旅行となるのである。

何處も同じことであるが、支那の僧侶は特に信仰なく、學識なく、只だ汲々として利にのみ奔つてゐる。併し普陀山の僧侶は、比較的甚しくない樣に見受けられた。只だ困ることは、信徒から淨財を得る手段として、佛像の修繕、新造、堂宇の修理を間絶なくやることである。誠に結構なことの樣だが、其の結果古式は忽ち抹殺せら

れ、古佛像は碎かれて、焚かれて仕舞ふ。此の寫眞は普陀山の某庵で、彫工が觀音に附隨する童子を彫刻してゐる有樣である（第一一八六圖參照）。これが纏て金箔を以て被はれ、過當の位置に据ゑられるのである。信徒はこれを見て隨喜の涙と共に多額の金錢を喜捨するのである。終りに臨んで、諸君に一言したいのは、諸君若し渡清さるゝ機會あらば、上海から僅かに一晝夜以内で達し得らるべき、此の日本の高僧の開基なる、世界稀有の靈地なる、兼ねて世界稀有の風景なる、南海普陀山の訪問を忘却せられざることである。

（明治四十一年六月廿四日時事新報文藝週報）

南海普陀山終

五山十刹圖に就いて

五山十刹圖に就いて

五山十刹圖二卷は加賀金澤に在る曹洞宗の伽藍大乘寺の所藏で、同寺の開祖徹通が後深草天皇正元元年卽ち南宋開慶元年に入宋し、自ら五山十刹を歷訪して、其の建築や堂內の設備等を手寫したものであると傳へられてゐる。然るに、これと同じものが京都の東福寺にもあり、又若狹の凌雪山常高禪寺にもあるが、これは別に原本が有つて三ケ寺でこれを謄寫したものらしく思はれる。但し大乘寺のものは五山十刹圖と稱し、東福寺のものは大宋諸山圖と云ひ、常高寺のものは大唐五山諸堂圖と云ひ、それ〴〵名稱を異にしてゐる。併し內容は全く同じと云うても差支へない位で、只極めて些細な點に於いて互に相符合しないのである。併し大乘寺にあるものが最も優秀であり、且つ徹通との關係もある點から考へると、元來大乘寺に原本が在つたので、今日同寺に存在してゐる二卷の繪圖は恐くは後世の模寫であらうと思はれる。試みに大乘寺、東福寺、常高寺の三種の內容を比較して見ると、彼に有つて此に無く、此に有つて彼に無いものがある。結局此の三種の繪圖の外に別に原本が有つて、三ケ寺で別々に謄寫したので、謄寫の際各多少の脫漏や誤寫を生じたものと思はれる。

又大乘寺に在るものと東福寺に在るものは白描であるが、常高寺にあるものは彩色である。これから考へると原本にも彩色があつたものらしい。

大乘寺所藏の畫卷は、徹通手寫の原本であると傳へられてゐるが、其の年代に就いて、黑板文學博士に鑑定を乞うた所が、博士は正元頃のものとは認められぬと云ふことであつた。其の他の識者の意見を敲いて見たが、矢張り鎌倉時代のものとは認め難い、恐らくは足利時代の中頃のものであらうと云ふ結論であつた。即ち此の畫卷は正元の頃に徹通が入宋して手寫したものを、足利時代の中頃に謄寫したものであると推定される。即ち原本は何時の頃にか失はれて今は世に無いものと考へなければならぬ。

假令現在の畫卷は足利時代であつても、其の內容は多分南宋末のものの忠實な寫生であると認めらるゝ。何を以て斯く推定するか、それには多少の根據がある。

元來此の問題を解決するには、少くとも四の方面から研究すべきものと思ふ。第一は畫卷中の記入の地名、寺名等の史的研究、第二は畫卷中にある用語、文字の研究、第三は殿堂內部の諸設備や用具の研究、第四は建築の形式手法の研究である。此の中、第二第三は予の如き佛教の歷史に暗く、殿堂內部の設備及び儀式作法に通じないものには迚も分らぬ。建築形式のことは多少調べた點もあるが、何分茫漠たる支那のことであり、比較研究の材料も極めて貧少であり、元來南宋、元、明の建築の特性に就いて劃然たる區別を立てることが既に非常な難事である。況んや建築家ならぬ一緇衣の寫生に憑つて、其の形式を論じ其の年代を定めようと試むることは到底思ひもよらぬことであるが、圖中やゝ正確に寫生してある料栱の形などから推測すると、南宋から元にかけて行はれた手法であると認められる。日本でも鎌倉時代に支那から輸入した所謂から樣の禪刹建築には、此の圖に現はれてゐる手法と殆ど寸分違はないものが澤山ある。即ち日本の所謂から樣なる手法が果して支那傳來であることは明瞭になつたが、併し此の手法は尙ほ長く明代にも行はれたのであるから、此の畫卷に宋式の建築法が見えるからと云うて、直に畫卷が宋代のものとは云へない。

又第一の問題たる地名寺名などに就いては、自分の專門とする所ではないが、多少の興味を以て調べて見度いと思ふのであるが、此の點から見ると、此の畫卷の內容は、元以前即ち南宋時代の有樣を寫寫したものと認むべき理由もあると思ふ。今次に其の二三の例を擧げて見よう。

第一、圖中に建康府蔣山の圖がある。建康府は今の江寧府即ち南京を首府とする地方である。此の地方は南宋の建炎三年、即ち我が崇德天皇大治四年に建康府を置かれ、元の至元十四年、即ち我が後宇多天皇建治三年、南宋の臨安城陷落の翌年に建康路と改められた。圖に建康府と署してあるのは、元以前の稱呼に憑つたものと思はれる。

第二、圖中今日の寧波府を明州と稱してゐる。明州とは唐より宋末までの稱呼で、元には慶元路と呼び、明には寧波府となつた。これも元以前に書いたと云ふ證據になると思ふ。

第三、圖中五山の一なる杭州府臨安縣の徑山の所在を示して臨安府と云つてゐる。按ずるに、此の地方は唐五代に杭州と云ひ、宋に臨安府と云ひ、元には杭州路、明以後には杭州府と爲つた。即ち圖に云ふ所は宋代の名である。これも此の圖が元以前の有樣を現はしたものと考ふべき理由となる。

第四、圖中今日の紹興府を越州と呼んでゐる。越州と云ふ名は唐より五代までに行はれたもので、宋以後は既に紹興府と云つてゐる。これで考へると、此の圖は宋以前のものかとも思はれるが、併し支那では古代の名稱を後世までも襲用する習慣がある。此の時代に紹興府と云ふべき處を態と越州と云うたかも知れぬ。若し然りとすれば、第一乃至第三の理由もこれに由つて說明せられ、元以前の圖と認める理由が消滅することになる。

第五、五山の一なる阿育王山阿育王寺は圖に育王山廣利禪寺と書いてある。何時から何時まで廣利禪寺と呼ばれてゐたか詳かには調べが附かぬ。たゞ元の至正二十四年（後村上天皇正平十九年）の重修記には廣利禪寺とあり、明の嘉靖乙酉（後柏原天皇大永五年）の記には育王寺とある。廣利禪寺と云ふ名は多分宋元の名であると想はれる。

第六、五山の一なる靈隱寺は圖に景德靈隱寺と書いてある。按ずるに、これは宋の景德四年（一條天皇寛弘四年）に命名されたので、康熙三十八年に勅して雲林禪寺の名を賜はり、今日ではたゞ靈隱寺と通稱してゐる。故に景德靈隱寺と書いてあつても、必ず元以前であるだらうと云ふ理由にはならぬ。

第七、五山の一なる天童山は今、宏法寺と云ふが、圖には其の正門に勅賜景德之寺とあることを記してゐる。此の名稱の由來も靈隱と同樣であると記憶してゐる。即ちこれも必ずしも元以前の現狀であるとは斷言されぬ。

第八、五山の一なる西湖南岸の淨慈寺は即ち古への報恩光孝禪寺で、圖にも此の古名で現はれてゐる。此の命名は紹興九年（崇德天皇延保五年）に行はれた。何時から此の名が用ひられなくなつたかよく分らぬが、恐くは宋元は勿論、其の後までも行はれたかと想はれるが、勿論これを以て畫卷が元以前であると云ふ證據とする事は出來ぬ。それから圖の終りの諸山の額集の中に、正門の額に勅賜淨慈禪院明州とあるのがある。これは明州と明記してあれば、必ず西湖の畔の淨慈寺ではない、即ち五山の一なる淨慈寺ではない、五山の一なる淨慈寺は西湖畔の淨慈寺であることは、西湖志にも

宋時定京輔佛寺推次甲乙尊表五山爲諸州之綱領而淨慈在其中

とあれば慥かである。

以上數箇條を擧げて見たが、實は要領を得ないのである。元來前述の如く支那に於いて地名が改められても、なほこれによらずして古代の名稱を襲用するの例は甚だ少からぬことであり、且又圖中に往々元以後の名稱も見えるのであるから、以上の二三の例を以て輕々に元以前の有樣を現はしたものと斷定することは出來ないかも知れない。要するに、これはなほ未知數として更に大に研究すべき問題である。

次に此の畫卷の內容に就いて極めて簡單に記述して見よう。實は大乘寺のに兇るのが最適切であるが、今大乘寺のは見ることが出來ない、故にこゝに若州常高寺のものに就いて記述するのである。大乘寺及東福寺のものと多少の相違があることは前陳の通りである。

表題は大唐五山諸堂圖としてあるが、內容はこれと符合しない。五山は凡て記載されてゐるが、五山以外の寺もある。大乘寺の五山十刹圖も事實と符合せぬ。何となれば、十刹の中で圖に見えてゐるのは少數で其の大多數は記して無い。たゞ東福寺の大宋諸山圖と云ふ題は蓋し最適切である。大宋の五山は前陳の通り、即ち左の如く

である。

一、徑山興聖萬壽禪寺　杭州府臨安縣城北五十清里（臨安縣）
二、景德靈隱寺　杭州府西湖西岸（錢塘縣）
三、淨慈山報恩光孝禪寺　杭州府西湖南岸（錢塘縣）
四、天童山景德寺　寧波府城東六十清里（鄞縣）
五、阿育王山廣利禪寺　寧波府城東四十五清里（鄞縣）

又、十刹は禪林象器箋によれば左の如くである。

一、中天竺山天寧萬壽永祚寺　在杭州臨安府
二、道場山護聖萬壽寺　在湖州烏程縣
三、蔣山太平興國寺　在建康上元府
四、萬壽山報恩光孝寺　在蘇州平江府
五、雪竇山資聖寺　在明州慶元府
六、江心山龍翔寺　在溫州永嘉縣
七、雲峰山崇聖寺　在福州住官縣
八、雲黃山寶林寺　在婺州金華縣
九、虎丘山靈巖寺　在蘇州平江府
十、天台山國清教忠寺　在台州天台縣

此の五山の中で、淨慈寺の圖は畫卷中に唯一つ門額の圖より外に何も見えない。十刹の圖も蔣山に屬するものは見えるが、其の他のものは門額の題名が少しあるばかりで、圖には現はれてをらぬ。其の代りに五山十刹以外の名刹、例へば金山寺などがある、或は當時金山寺が五山又の十刹の一に加つてゐたのでは無いかとも思はれる。何となれば、此の圖中に最詳細に寫されてゐるのは徑山で、これに次で靈隱、天童、育王、金山であり、これに次で天台山萬年寺がやゝ詳かであるが、其の他は殆ど道ふに足らぬ。淨慈寺の圖はたゞ一箇の額の外は何も無いところより考ふれば、恐らくは當時此の寺は五山に加はらないで、其の代りに金山若くは天台が加つてゐたのであらうと思はれるくらゐである。

さて次に二卷の內容の重なるものを順次に列記して見よう。

內容を一見して先づ注意すべきことは、圖の如何にも拙劣なことである。文字も頗る惡い。これは大乘寺のものに比較すると雲泥の差がある。又朱書にて書き入れが澤山ある。殊に異本に云々とあるのは注意すべき點である。これは原本の他に參考の圖書を引き合せたのであらう。他に參考圖書としては大乘寺のや東福寺のが使はれたであらうが、其の他にも有つたかも知れない。今日では此の種の畫卷は前陳の三種より外に無い（予の知れる範圍に於いては）が、嘗つて尙ほ多くの謄本が有つたかも知れぬと思ふ。

第一卷を開けば、先づ今上皇帝萬歳の牌及び外二つの牌があり、次に

祖師堂（堂の中央に祖師の像と覺しきものを安置せり、故に假に斯く名け置きたり）

列座席次の圖（何寺に屬するや不詳）

天童樣柵天童樣山門扇（門扇にて門鐵石鼓等も畫けり）

天童樣華頭窗及欄間（日本禪刹に慣用されたる型なり）

金山寺八角輪藏（宋の營造法式にある型と稍や似たり）

觀音堂列座席次圖
榜示その他雜件　（何寺のものなるや不詳）

天童山平面圖（門前に池あり、池の前に七基の幢宇塔あり、此の配置今日も變らず、又門に勅賜景德之寺の額を示せり。）

靈隱山平面圖（伽藍南面し正面は東にあり、門より長き參道を經、飛來峯に沿うて殿前に至る、殿前に水あり、水に接して亭あり、此の配置今日も少しも變らず、たゞ今日の現狀は天王殿左右に吳越王建立の石幢一對あれども、圖には見當らず、寫生の際脫漏したるものと認む、伽藍平面の中央部の配置は左の如し、但し山門は天王殿なり。（第七〇九圖）

坐禪堂　方丈堂　前方丈殿　法那殿　舍利殿　鼓樓　鐘樓　山門

天台萬年山平面圖（中央部の配置は左の如し、但し平田は總門にて、次の門は二天門なるべし。）

榜示　覺音堂　大伽藍　法舍殿　羅漢殿　佛殿　天王殿（門）　平田（二）　八角亭

徑山寺法堂の斷面圖
同虹梁及斗栱の圖　（何れも建築的寫生圖なり）

靈隱寺鼓臺

徑山寺法座

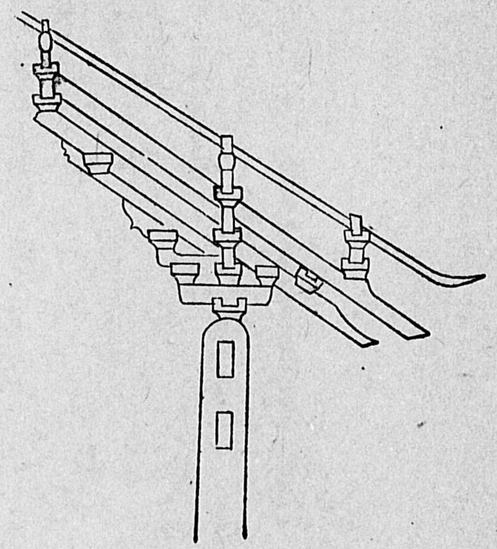
徑山寺藍　（天蓋にて面白き形式なり）

靈隱寺椅子

靈隱寺屏風

五山十刹圖に就いて

徑山寺聖僧宮殿（須彌壇の型をなせる座なり）
徑山寺僧堂椅子
徑山寺三塔樣方丈椅子
徑山化城接待樣客位椅子
屏風
卓
前方丈椅子
（共に徑山のものなるべし）
徑山寺座床
勅賜報恩光孝禪寺額（淨慈寺の額なり）
徑山寺磬
徑山寺佛壇（須彌壇なり）
明州碧山寺水磨
徑山寺僧堂團爐裡
料栱の圖（此の料栱は何處のものとも記入なし、恐くは徑山始め諸寺に慣用されたるものならん。日本に於いて鎌倉足利時代の禪刹に賞用されたる、所謂から樣の料栱と稱するものと符合す。）



香臺

次に第二卷の內容は
臨安府徑山寺海會堂圖（平面圖に席次を示せり）
徑山樣障屏（衝立樣のものなり）
五山十刹圖に就いて

靈隱僧堂

金山佛殿（重層建築の前面圖なり）（第七一〇圖）

金山山門香爐

靈隱樣山門香爐

殿　堂（說明なきを以て何處の何堂なるやを知らず）

金山寺樣東司

育王山洗面處

建康府蔣山小遺處

天童山宣明（浴場の圖なり）

雲堂四方牌（何處のものなるや不明）

安吉州何山寺鐘及鐘樓（此の鐘樓は四層の建築にて立面を示せり）

徑山寺石鼓其の他一點

觀音堂前架及側架（徑山なるべし）

綱紀堂（徑山なるべし。堂の中央に達摩、其の右に慧可、左に百丈、開山より以降九代に至る配置を示せり）

徑山楞嚴會之圖（堂內に諸方より參列せる僧の席次を示せり、內に日本の分六座を發見せり、觀上座二、快上座

一、西上座一、然上座一、堅上座一、之なり。）

諷經の圖（堂內の席次及諸佛像を示せり）

禮天目和尙叢林告香圖及告香榜

僧堂念誦及巡堂之圖（席次を示せり）

終りに諸山額集がある。外山門、中門、正門と三種に分類してあるが、順序甚だ錯亂して要領を得難い。其の中から五山の正門の額を拾ひ集めると次の如くになる。

勅賜景德之寺（天童、今の宏法寺）

阿育王廣利禪寺（阿育王山、今の阿育王寺）

勅賜報恩光孝禪院（今の淨慈寺）

勅賜景德靈隱禪寺（靈隱山、今の雲林寺）

徑山興聖萬壽禪寺（徑山）

要するに、此の畫卷の內容は極めて趣味多きものである。凡そ禪刹に關することは其の大體の建築物の配置、殿堂箇々の形狀構造、堂內の設備、佛壇、卓、椅子等の佛具、式典の作法席次一も漏す所がない。殊に厨房、厠房、浴場、洗面場等まで行き渡つて詳細に寫してあるのは驚歎の至りである。畢竟支那禪刹の制度を研究してこれを日本に適用して見ようと云ふ熱情に驅られて、斯くの如き微細な調査をしたのであらうと思ふ。

予は先年蘇浙の間を巡遊した際に、五山十刹を悉く歴訪して見たいと思つたが、種々の故障でこれを果さなかつた。併し五山は徑山を除く外は皆視察するの便を得た。十刹に至つては、當時其の所在すらなほ甚だ確實を缺くものがあつた爲に、僅かに其の四五を見たに過ぎなかつた。歸朝の後再び五山十刹圖を見て、其の現狀と對比し尠なからず感興を催した。何れ、やゝ詳細なる調査を遂げ度いと思ひながら、未だ其の緒に就くに及ばずして放棄して置いた。

今回佛教史學に此の事を載せらるゝと云ふので、倉皇筆を執つて不取敢前後不揃の不得要領の一文を草したのである。杜撰疎漏の點は偏に諸君の叱正を待つのである。五山以下諸寺の建築の現狀等に關しては、他日更に所見を陳述して諸君の高教を乞ひ度く思うてゐる。

（佛教史學第一編第四號所載、明治四十四年七月）

五山十刹圖に就いて　終

廣東に於ける回教建築

廣東に於ける回教建築

序言

先に提圓中村先生の鋸屑集（一二）の Minaret に關する御意見を拜見して誠に御同感を禁じ得ない。建築語彙編纂委員會でこれを「長尖塔」と譯されたさうであるが、中村先生はこれを照塔と譯するを以て適當とすと言ばれて居る。自分は「照塔」の方が「長尖塔」よりも遙かに適當であると思ふが、それよりも「光塔」と呼んだ方が更に適當であると思ふのである。それは漢人が既に古へより Minaret を光塔と呼んで居るからである。勿論吾人は漢人に盲從するの意ではないが、光塔の文字が如何にも相應しく思はれるのである。

元來 Minaret なる語はアラビア語の Manara 即ち Light より轉じたもので、これを直譯すれば燈塔、照明塔、光塔などと云ふべきである。若し又直譯を好まずとならば、其の回教建築に專屬する事實よりしてこれを回教塔と呼ぶも面白からうと思ふ。併しそれよりも、漢人が既に命名して今日でもなほ使用されて居る光塔と云ふ簡明な語を採用するのが一番適切であると思ふ。實例は廣東省廣州府城内に於ける支那最古の回教寺なる懐聖寺内に在つて、其の街を光塔街と云つて居る。

自分は、此の懐聖寺のことに就いて曾つて史學會に於いて一場の談話を試みたことがあつたが、未だそれを雜

誌等に公表しなかつた。今此の機會に於いて、廣東に於ける回教建築に關する一斑を述べ、以て諸君の參考の一端に供しようと思ふ。

（一）緒　言

自分は明治四十三年の春、廣東地方を旅行して建築に關係ある事蹟を取調べたのであるが、其の中で回教の遺跡に關する事項、即ち序言に述べた懐聖寺を始め、種々なる寺院墳墓等の調査が自分には最も面白く感じた。由つてこゝに其の實際の見聞を述べて見るのであるが、元來廣東に於ける回教の遺蹟に關する文獻はこれまでも少くないので、本問題は實は珍しくも新しくも無いのである。唯自分は現場を踏査して既往の文獻以外に多少の新事實も發見し、又それに就いて種々なる疑問も生じたのである。乃ち茲に其の大要を述べて諸君の高教を得度いと思ふのである。尤も曩に此の問題に關聯して、京大文科大學教授桑原博士を始め東洋史專門の諸家が既に史學上から種々なる研究を遂げられ、懐聖寺の傳説に就いて斬新な意見を發表されて居るので、其の説によれば自分が茲に述べようとする懐聖寺創立の一節の如きは全然虛構説となるのである。自分も亦夙に其の虛構説が正論であることを確認して居るのであるが、兎も角も現場の有樣をこゝに記錄に止めて置くことは、決して無益でないと信ずるのである。況んや建築的物件に就いての實際の記載は必ず斯學上何等かの參考に資すべきものあるに於いてをや。

（二）廣東の回教寺に關する文獻の諸例

自分は先づ廣東の回教寺即ち Mosque に關する文獻の數例を掲げて見たい。實は第一アラビアの文獻を渉獵して之を掲げねばならぬ筈であるが、此の方面に關して自分は全く無知である。又漢人の手に成つた文獻も必ず多數無ければならぬと思ふが、此の方面に於いても自分は充分に取調べる時を得なかつた。歐米人の著書も自分の手許に所有して居るものは僅に數種だけで、それすらも其の價値の疑はしいものもある。斯く説いて來ると、ここに掲ぐる所の諸例のみでは甚だ心細いので、東洋史專門家ならずとも、これに重きを置くに躊躇せねばならぬが、試にこれを列記して見よう。

（い）Parker 著 China and Religion に曰く

廣東に有名なる回教塔がある。俗傳によれば西紀六一一年（隋の大業七年に當る）にムハメッドの叔父なるサード・ワッカス Saad Wakkas なるものが渡唐し、廣東と南京とに回教寺を建てたが彼は廣東に於いて死んだ。併し M. Devria 氏の考證によれば、彼は薩珊朝の波斯國との最後の戰（西紀六三六年、唐貞觀十年）に參列したる人にてムハメッドの第二の甥に當り、メヂナにて死んで居るので支那に渡航したことは無いと云ふ。廣東には六つの回教寺がある。其の内五は城内にあり、又其の一つは斜塔（Leaning Pagoda）を有して居るが、これは唐代の建立と云ふ。此の塔は西紀一三四三年（元至正三年）に燬け、一三五〇年（元至正十年）マームッド之を再建す。同寺内のアラビア文の碑銘によれば、一三五一年（元至正十一年）即ちヘジラの七百五十一年に改築さると云ふ。同碑の下に刻せる漢文の銘には一もサード・ワッカスのことを言はず、只「凡そ八百年前回教流布す」と云うて居る。

此の一節大いに實地と異つて居る。懷聖寺の至正十年（パーカーが至正十一年とせるは誤りである）の碑は上部にアラビア文を刻し、下に漢文を刻して居るが、其の中に「乃第子子撒哈八以師命來東教興歳計殆八百製塔三此其一……」とある。撒哈八とは卽ちワッカスを謂ふのである。

彼又曰く「第六の回教寺は廣東の城北にあつて、サード・ワッカスを葬つて居る。西紀一七四九年（清乾隆十四年）にハヂ・ムハメッド Hadji Muhammad これを訪ひ、同じくこゝに葬られて居る。」

これは廣東城外北郊の蕃人冢を謂つたので、よく實際と吻合して居る。蕃人冢のことは後に說明する。

（ろ）Bushell 著 Chinese Art に曰く

ムハメッドの叔母なるサァド・イブン・アブー・ワッカス Saad-ibn-abu-wakkas なる者、布教の爲めに支那に渡來し、廣東に回教寺を造つた。此の寺は西紀第九世紀に廣東にアラビア人の殖民が繁榮した頃には現存して居つた。一三四一年（元至正元年）に燒けたが軈て再建され、一六九九年（清康熙三十八年）に更に再建された。

（は）Dyer Ball 著 Things Chinese に曰く

第七世紀中ムハメッドの叔母ウォス・カシン Wos Kassin なる者、支那に渡來して回教を弘布した。廣東に四の回教寺があるが、其の內の二はウォス・カシンが建立した。廣東に於ける二基の回教塔の一つは其の回教寺の一に附屬して居る。彼の墓は城の北門外に在る。ウォス・カシンは廣東に十五年間滯在の後死んだのである。

（に）Navarra 著 China and Chinese に曰く

ヮー・アビ・カブシャ Wah-Abi-Kabsha なるものはムハメッドの母方の甥であるが、六二八年（唐貞觀二年）に渡唐し、先づ西安に到りて太宗に謁し方物を獻じ使命を奏した。太宗これを嘉して回教弘布のことを許可したので、彼は廣東に最初の回教寺を造營した。

六三二年（貞觀六年）カブシャは再びアラビアに歸り、更に經典を携へて支那に再渡し（六三五年、貞觀九年）、間もなく死んだので廣東城北門外二千步の地點に葬つた。

（ほ）Williams 著 Middle Kingdom に曰く

回教は何時如何にして支那に傳へられたるや詳かならず、廣東には唐代に於いて既に回教寺存在して居た、其の名を懷聖寺と云ふ。Remember-the-Holy Temple の義である。其の塔外觀平滑で、支那の傳說によれば、其の高さ百六十五キュービット Cubit であり、毎年五六月に寺僧其の上に登つて號呼すると云ふ。城北にムハメッドの母方の叔父の墓がある。

（へ）支那の文獻

本篇を草せんが爲に參考した文獻は實に極めて貧弱であるが、それでも前記外人の記載の根據となつた文字以外に珍說奇文が少くない。其の名目を列記すれば大要左の種類である。

一、廣州府志

二、羊城古鈔

三、廣東考古輯要
四、廣東新語
五、諸　碑
六、扁　額
七、棟　札

此の中で碑は最も興味あるもので其の數も亦案外少くは無い。碑の全文を掲ぐるのは徒に紙面を費すの虞があるからこれを略し、後段必要の部分のみを拔萃することにする。府志以下の文も後段に掲げる積りである。

さて以上の文獻に徵するに諸說互に一致せぬが、兎に角唐代にムハメッドの親族なるワッカス（異說もあるが）なるものが渡來して廣東に回教寺を造つた。即ち懷聖寺であつて、此の寺に回教塔があつた。ワッカスは廣東城北に葬られたと云ふことはほゞ一致して居るやうである。なほ次に今少しくワッカスに關する事蹟を述べて置き度い。

（三）ワッカスに關する事蹟

東洋史專門家は疑問のワッカスを以て烏有の人と認めることに一致して居るらしい。果して然るや否は自分は知らないが、少くとも唐の貞觀中に廣東に回教寺が現出したとは信ぜられぬ。なほ少くとも回教塔が支那に於いて第七世紀に現出したとは信ぜられぬ。去りながら支那に於ける此の傳說が如何なる程度まで想像を逞しうしたか、又如何なる程度までこれが信じられて居るかを觀察して見るのも無益では無いのみならず、其の內に別に又何等かの參考に資すべき資料を見出すことを得ると思ふのである。

第一所謂ワッカスの名が區々になつて孰れが眞か分らぬが、支那でも種々なる音譯を試みてをる。次にこれを列擧して見よう。

一、斡葛思（ワッカス）　廣東城北先賢古墓碑寺
二、蘇哈白汪葛素（ソヘバワッカス）　廣東城北大忠墓碑
三、蘇哈白斡葛思（ソヘバワッカス）　同　上　（嘉慶）
四、賽爾德（サアド）　廣東城北先賢古墓寺碑　（嘉慶）
五、色哈白賽阿德斡葛思（ソヘバサアドワッカス）　肇慶東清眞寺碑
六、撒哈八（ソヘバ）　廣東懷聖寺碑　（至正）

さて又彼が回教々祖ムハメッドと如何なる親族關係であつたか、これも頗る怪しむべきものである。羊城古鈔には、ムハメッドの母舅と云ひ、或は甥と云ひ叔父と云ひ更に分らぬが、これは玆には分らぬとして置くより外はない。

さて此のワッカスは、何時何の爲めに渡唐したかと云ふに、支那側の傳說によれば渡來を隋の開皇とする說と唐の貞觀とする說とあり、目的に就いては本來通商貿易の爲めとする說と、回教弘布の爲とする說とがある。今

やゝ繁雜に陷る嫌はあるが、これに關する碑銘を擧げて解釋して見よう。

（い）　廣東城北先賢古墓寺卽ちワラカスを葬つた寺の碑文に曰く

開皇六年丙午（碑文に貴聖紀元と云ふも實はヘヂラの三年に當る）太史占星知西方生有異人遣使往徵其實明年丁未聖遣先賢等四人偕來答禮建懷聖寺于羊城以居來使（舊志に唐海船を開く、聖先賢を遣して賈を此に求むと云ふ說と全く異つて居る）寺內有光塔中空外直高十六丈頂有金鷄仙鶴則府志可徵也未幾先賢旋國閱二十餘年己巳（西紀六〇九年、隋大業四年）煬帝遣使圖天下方域聖復命先賢奉經來東闡宣敎化後聞聖歿哀毀過甚卒于番寓邦人以禮葬于此（下略）

此の說が珍奇である。勿論其の出處は分らない。

（ろ）　廣東省肇慶府城內東淸眞寺の碑に曰く

隋開皇中有色哈白賽阿德斡葛思者入中國而傳其敎（下略）

（は）　廣東城北大忠墓の碑に曰く

當貞觀始年至聖穆罕默德遣蘇哈白斡葛素賚送天經來入中國（下略）

大忠墓の由緒は後段遺跡の部で說明するのである。

（に）　先賢古墓寺の他の一碑に曰く

先賢斡葛思由唐代頒經傳敎而來東土初建光塔及懷聖寺居焉寺塔告成尋歿葬於于此維時貞觀三年也（下略）

（ほ）　廣東城北先賢古墓寺に屬する蕃人冢の內 Hadji Mehemed の碑の終にワッカス死歿の日を刻して曰く

唐貞觀三年歐墨勒（オーマル）爸（バ）爸爲克理法（クリファ）年蚤勒（ヂール）哈者見月第廿七日歿

此の三年の三の字後世の挿入かとも疑はる。文は貞觀三年歐墨勒（オーマル）Omar が克理法（クリファ）Khalifa となれる年の蚤勒（ヂール）哈者（ハジャ）見の月、廿七日歿と云ふ意であらう、これが一番精密にワッカスの死の時を勒したものである。

要するにムハメッドは其の恐るべき眼を支那經略に注ぎ、ワッカスを遣はして其の事情を探らしめたと解して見たならば面白いと思ふ。恰も當時支那は古今を通じて文明の最高潮に達した唐の太宗の貞觀年中であつたとすれば、猶ほ更興味があるやうに思ふ。

ワッカスの墓が蕃人冢にあることは何れの文獻にも見える。卽ち

廣州北郊□□許曰桂華之岡天方先賢賽爾德之墓在焉（先賢古墳事碑）

蕃人塚　在城西十里壘壘數千皆首西向（廣東考古輯要）

按回々墳在廣城北門外建於唐貞觀三年其墳築拱頂形如懸鐘人入內語聲相應移時方止故俗呼爲響墳（羊城古鈔）

これはワッカスの墓を記して、其の眞を寫したものである。後段に尙ほ解說するつもりである。

ワッカスの事蹟に關することは此のくらゐで止め、次に彼の經營したと稱する懷聖寺の沿革に就いて一言せんに、此の寺には一基の Minaret 卽ち光塔が附屬してをり、廣東地方に於ける回敎寺の首位に位してゐたものと認められる。元の至正癸未（西曆一三四三）に、伽藍は一たび燬けたが、光塔は元來全部磚造であるから、多少破損

はしても燒失したとは考へられぬ。至正十年には重建された。明の洪武二十年（西暦一三八七）或は洪武二十五年

事項 ＼ 文献	China & Chinese, Navarra.	China & Religions, Parker.	Chinese Art Bushell	Things Chinese, Dyer Ball.	支那文献
幹葉西初來	628（貞觀二）	611（大業七）			587（開皇七）蕃
幹葉西歸國	632（貞觀六）			幹葉西滯在十五年）	609（大業四）蕃
幹葉西再來	635（貞觀九）				627（貞觀元）甎
懷聖寺建立	628（貞觀二）				629（貞觀三）（羊蕃
幹葉西の死			1341（至正元）		1343（至正三）懷
元の羅災		1343（至正三）			1350（至正一〇）懷
元の重建		1350（至正一〇）			1387（洪武二〇）志
金雞墜落					1393（洪武二五）羊
明の重建					1467（成化三）札
金雞再墜					1468（成化四）羊
清の重建			1699（康熙三八）		1669（康熙八）羊
					1695（康熙三四）甎
					1698（康熙三七）懷

〔備考〕　支那文献欄中の略字解　蕃＝蕃人塚の碑　甎＝懷聖寺の甎　羊＝羊城古鈔
懷＝懷聖寺の碑　志＝廣州府志　札＝懷聖寺の標札

（西暦一三九二）には光塔の頂にあつた金雞が墜ちた。明の成化三年（西暦一四六七）或は成化四年に伽藍は重建された、清の康熙八年（西暦一六六九）には金雞が再び墜落した。康熙三十七年或は三十八年（西暦一六九八或は一六九九）に伽藍が又重建せられて今に至つたのである。今これを表の形にて示せば前頁の如くになる。

（四）調査の經過

予は廣東に出張する以前に於いて、先づ文獻に由つて廣東に於ける建築物の調査を試みたが、勿論要領を得なかつた。併し回教建築に關しては、廣東に支那最古のモスクの存在すること、其のモスクには一基のミナレットが附屬して居ること、なほ其の他に若干のモスクが有ること、回教墳墓が廣東城の郊外に在ること等は朧げに分つたのである。

さて廣東に著して日本領事館及び在廣東の同胞諸氏に就いて話を聞き、更に支那の官衙及び識者に就いて問ひ質し數種の文獻に就いて研究し、漸次に事情が明瞭になつたので、實地に臨み現場に就いて調査を試みたのであるが、其の間に種々なる行き違ひや面倒が起り、充分なる成績を擧ぐることが出來なかつたのである。こゝに其の顚末の要領を述べて、如何に支那に於ける實地調査が容易でないか、如何に支那人の古蹟即ち歴史的記念物に就いて無頓著であるかを報告するのも强ち無益ではあるまいと思ふ。

予は先づ廣東市街の狀況を一と通り觀察すべく縱横に歩き廻つたが、大西門を入つて東行數町にして既に一基の怪塔が六榕寺の華塔と相對し、櫛比せる民家の屋上に高く秀でて立つのを見るのである。即ち支那最古のモス

ク即ち懐聖寺に附屬するミナレットである。此の街を光塔街と云ひ此の塔を光塔と呼んで居る。予は第一に此の塔の調査に著手すべく現場に行つて見ると、塔は懐聖寺の本堂の南方百餘歩の所に游離して立ち、四方に半破壞せる土塀を繞らして近寄ることが出來ない。仰いでこれを見れば其の形は外人が Candle Pagoda と名付けたも道理、外面平滑なる細高い圓塔で、上に蠟燭の心にも似たる細い短い棒狀の部分が立つて居る。一見して吾人は其の回教建築であることを直覺するのに、外人等は何と思つたのか、これを Pagoda と呼ぶのは可笑しいことである。予は附近の民家に就いて梯子を借り、これを約七八尺許りの土塀にかけて、此の塀を乘り越え塔の下に行かうとした處が、四邊の住民共はしきりに罵り騒いで予を制止するのである。彼等は此の塔に近付いてはならぬと主張し、若し強ひて近付き度いならば其の筋の許可を得よと云ふのである。由つて予は日本領事館を介して廣東省の總督衙門を訪ひ、總督と會見して光塔視察の許可を與へられむことを請うた。然るに總督は極めて無造作なる態度にて「毫も差支なし隨意に視察せられよ。塔内に入りても苦しからず、足代をかけて外部調査するも可なり、如何樣にも勝手にせられよ」と云ふ。然らば許可證を下附されたし、然らずんば市民の疑を解くに由なかるべしと云へば、否々全然許可證の必要なしと云ふ。然らば誰か案内として吏員を差出し給はれと乞へども、全然其の必要なしと云ふ。予は覺束なくも再び光塔に赴き、總督の許可を得たりと説明して塔に近付かむとした處が、果然市民は承知しない。予は轉じて懐聖寺に赴き寺僧に面會して、光塔視察の便宜を與へられよと依頼したが、寺僧は承知しない。是非共の筋の許可證を見せて呉れねば塔の視察の便宜は與へられぬと云ふ。即ち再び總督衙門に就いて許可證を請うた處が、衙門では不得要領なことを言うて少しも分らぬ。荏苒數日の後始めて光塔のことは將軍衙門で處理するのであると云ふことが分つた。即ち將軍府を訪うて增祺將軍に面會し光塔調査の許可を乞うた。將軍は事もなげに承諾した。由つて光塔調査の日限を約し、當日將軍府の吏員と現場に於いて會合し、吏員から寺にも市民にも通告して貰ふことにしたのである。

當日予は光塔に赴いて吏員を待つて居ると彼は約を違へず來た。けれども寺と市民とに何等光塔調査の件を通告しないのみならず、予に向つて光塔調査を止めよと勸告した。予は且つ呆れ且つ怒つて其の不都合を詰責したが頓と要領を得ない。丸で暖簾と腕押しの體である。其の中に彼は他に急用があると言うて逃ぐるが如くに去つて仕舞つた。予は全く困つた。領事館に就いて適當なる方策を求めた處が別に名案もない。予は非常に落膽したが窮すれば通ずとかや、在廣東の同胞中知る人ありて、廣東在住の楊氏は曾つて日本公使を勤めた人で、日本人に對して多大の厚意を有するのみならず、熱心なる回教信者であり、懐聖寺の有力なる檀家であるから、此の人に依頼したら或は目的を達せられるかも知れぬと教へて呉れた。

予は直ちに楊氏を訪問した。そしてこれ迄の經過を話し、光塔視察の便宜を與へられよと依頼した。楊氏は溫厚なる長者である。徐ろに答へて曰く、「足下が總督衙門や將軍衙門に交渉したのは總て無益であつた。回教寺のことは何事も回教信徒の了簡に由るので、衙門はこれを如何ともすることが出來ない。總督や將軍は唯足下に對して無責任なる不得要領なる言辭を弄したに過ぎないのである。予は懐聖寺の信徒總代の資格を以て足下の爲め

に便宜を圖るべし」とて、令息を呼んで予に同行を命ぜられた。予は令息と共に光塔に赴いた。令息は寺僧と市民とに何やら說明して居たが、彼等は聽て令息の言に諾いた。

さて予は楊氏令息の斡旋に由つて梯子を土塀にかけて內に入り、瓦礫狼藉たる汚土を踏んで光塔に近づいて見た。塔は煉瓦を以て積み上げ外面に白漆喰を塗り所々に小窓が穿つてある。基壇は瓦礫に埋れてよく分らぬが、東方に入口が認められる。しかし此の入口は煉瓦を以て塞がれてあるから內に入ることは出來ない。楊氏の承諾を得て梯子を最低の窓にかけ、其の窓より內部を覗いて僅かに中心の圓軸を繞りて螺線狀の階段が底から絕頂まで續いて居ることを想像し得たのである。予は此の塔に足代を架けて其の絕頂に登り、具さに調査を遂げようとしたが、楊氏は切にこれを諫めた。彼は回教信徒が此の塔を尊信すること太だ深く、若しこれに攀ぢたり、漫りにこれを犯したりすれば必ず祟りがあると信じて居ることを說き、足代などを架けたならば信徒が如何なる騷ぎを起すやも知れずとて心配したのである。予は又「塔の窓が餘り小さくて內部を覗ふに不便であるから、願くば此の窓を破壞して其の中に入り具さに內部を調査するの便を得せしめよ、調査終りたる上は再び元の如く窓を修理すべければ」と懇談を試みたが楊氏はこれを肯ぜなかつた。彼は只管に信徒の反抗を恐れて居るのであつた。斯くして予は十餘日を費して辛うじて塔に近寄り、窓から內部を覗くことを得たのみであつた。併し光塔に梯子をかけて窓から覗くと云ふやうなことは、光塔始つて以來絕無のことであるので、附近の市民は驚異して罵り騷いだのであつた。兎に角此の位調査に手數を要した經驗は自分は未だ曾て無いのであつた。此の手數を要して測定し得た塔の寸法や其の建築的性質の研究の結果は、何れ次章に於いてこれを述べるのである。

懷聖寺の方は調査上別に何等の不便もなかつた。寺僧や信徒は、却つて日本人に對して多大の厚意を表して呉れた。此の外廣東の回教寺を歷訪して見たが、何處に於いても何等の故障を見なかつた。肇慶府に行つて其の二ヶ所の回教寺を訪うた時も極めて平穩であつた。これ等は何れも官憲の手を經ずして直接に寺を訪うたのであつた。勿論支那に於いて何處にも共通なる酒手の慣習は回教徒と雖もこれに漏るゝことはないのであるが、回教徒は幾分か他の支那人よりは廉潔であるやうに感じられた。

彼のワッカスの墳墓に關しては初め少しく分らなかつた。何となれば廣東考古輯要には城西十里に蕃人冢ありと記され、其の他の文獻には北門外にありと記され、土地の人に問へば皆知らずと云ふ。段々取調べて見ると北門外が正しいので城西と云ふのは誤りであると知れた。斯くの如き珍らしい古蹟が廣東人の間に一向に知られぬのは何故であるかと云ふに、第一彼等は甚しく無識である、第二に彼等は異教徒に關することは全然度外視して居る。第三に蕃人冢の所在地は今癩病患者の巢窟であり人多く嫌つて近寄らない。斯くの如き理由で廣東城の北郊極めて近距離に在るにも拘らず殆ど城民から忘れられて居るのである。それで廣東に於ける日本領事館員及び同胞も一人として蕃人冢なるものの存在を知る者がなかつたのである。予がこれを訪問して意外の好成績を得たのは深き感興を禁じ得ざる所であつた。予は彼のワッカスの墓の外に壘々たる多數の墓を見、なほ他に興味ある傳說ある珍例を發見し、同時に又モスクの建物や碑や其の他の關係物件を見て甚だ面白く感じたのであつた。

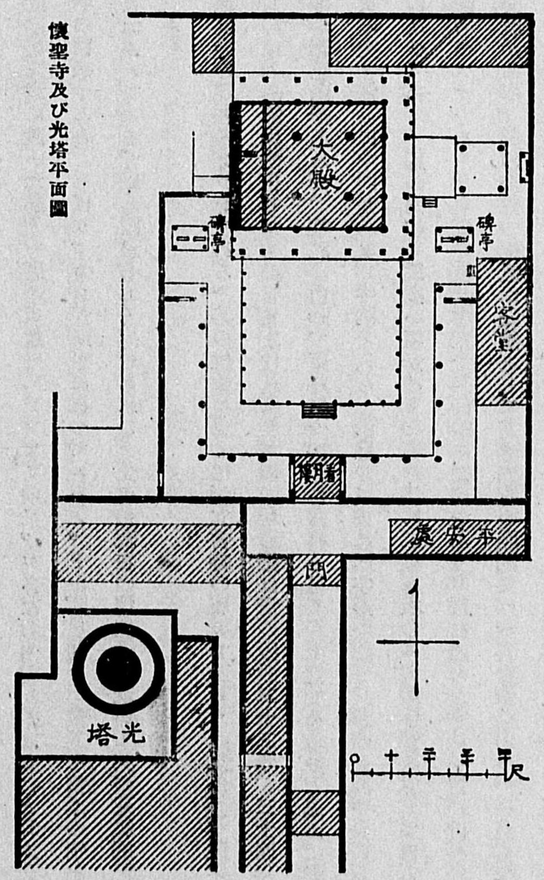
予は廣東に於ける各地方を訪問した際に、必ず又其の地方に於ける回教建築の存在を探檢することを忘れなかつた。併し意外にも其の實例は極めて少かつたのである。廣東は回教初來の地であり、古へよりアラビアの殖民も少からず、アラビアの船舶が頻りに出入した時代もあつたのであるから、回教建築も必ず少からず、回教藝術の影響も必ず大なるものがある筈であると想つたのであつたが、今日に於いては事實は豫想に反して居る。支那全土に於ける回教信徒の總數は約二千萬に達すると云ふは當らずと雖も遠からぬ見當であるのに、廣東全省に於ける回教信徒の總數は僅に二萬五千に過ぎないと云ふを以て見ても、案外に回教の勢力の少いのに驚かされるのである。建築に關聯した藝術例へば建築裝飾文様、建具彫刻などにも回教的趣味ある類例も見えるが、これとても根柢は支那式であり、果して其の若干部が回教的であるか判定に苦しむやうなものである。織物、陶磁器等の文様なども注意して見たが、確に回教式若くは其の系統と認められるものは極めて稀れであつた。併し此の問題は餘程精密に調査して見ねば容易に斷言することが出來ないから、今は別問題として多くこれに觸れない積りである、要するに回教は廣東灣より北上し、珠江、西江を溯つて廣東、肇慶等の地方に行はれたかと思はれる。北江の流域には終に實例を見なかつた。韶州にさへ一のモスクも見なかつた。又廣東の東部汕頭、潮州等を訪問した時も、終に此の地方に一のモスクをも發見しなかつた。但し潮州にある可溪塔は、其の外觀は支那式であるが內部の構造に回教式が認められる。肇慶の蕃塔も慥にミナレットの一種と認められた。これ等の建築的記載は次章よりおひ〳〵解說を試みる積りである。

（五）懷聖寺及び光塔

懷聖寺の傳說は第三章に說いた通り、唐の貞觀中にアラビアのワッカスなるものが建立したと云ふことになつてゐる。其の名の由來するところはワッカスが廣東に在つてムハメッドの死を聞き、聖人を懷ふの情を寄せて懷聖寺と云つたと云ふのであるが頗る附會らしく感ぜられる。兎に角現在の懷聖寺に就いて其の建築的記述を試むるのである。

次頁挿圖は懷聖寺の現在のプランである。其の位置は恐くは創立當時のまゝであらうと思ふが、殿宇及び附屬舍の大きさ形式等は勿論餘程變化したものと見なければならぬ。現建築は淸の康熙三十三年、三十四年、三十七年、三十八年等の諸記錄があるが、棟札に由つて康熙三十四年の重建と見るが至當であらうと思ふ。光塔街の北に入る狹い路次の突き當りに中門がある。中門を入ると廻廊が三方に凹字形に繞り、其の正面中央に看月樓があり樓下が通路になつてゐる。廊の內に一段高い壇があり、壇の奧に二重屋根の一大殿宇が屹立してゐる。これが懷聖寺の本堂卽ちモスクである。東廊の後が客堂で又同時に僧房であり、別に殿の左右に一對の碑亭がある。看月樓前右に平安處がある。其の全體の配置は宛然として支那固有の廟祠又は寺其の儘であり、一見して其の回教建築であることを直覺することが出來ない。又其の樣式手法も全然支那固有の建築であつて、何等回教建築の徵象を見出すことが出來ない。僅に本殿の額にアラビア文字が書いてあるのを見て、其の普通の支那建築でないことを知り得るくらゐなものである。

併し一度其の内部に入つて見ると、其の調子は全然普通の支那建築と異つてゐる。殆ど全く土耳其、波斯、印度等の回教寺院の中を見るが如き心地がする。先づ殿宇は南を正面にしてゐるが入口は東よりする。これアラビアの聖都メッカがほゞ正西に當るが故に、殿内の Mihrab を其の西壁に設くるの必要より、これと相對して入口を設けたのである。Mihrab は簡單なる拱式の龕であり、其の拱は所謂華燈形即ち印度式の一種である。龕内には金を以てアラビア文字が書いてある。周圍には裝飾文様がある。Mihrab の右に型の如く Mimber がある。壁面にはアラビア文字アラビア文様の裝飾があつて非常に面白い。就中文様が大體支那趣味でありながら、回教建築内に在つてアラビア文字と互に相調和して行くところに一種の妙味を覺ゆるのである、Mihrab の前通りの三間は Arch になつてゐるのも面白いことである。



懐聖寺及び光塔平面圖

光塔街

此の殿宇の外形は、普通の南清に於ける支那建築と全く同型であるから爰に詳記する必要はない。只其の外側の柱が花崗石の八角形で、其の礎盤が幾分回教建築の氣持があることや、此の柱から挺出する繪様斗栱の變つてゐることなどが目を惹くのである。

序に此の殿堂の建築年代に關し第三章に漏れた點を補つて置くのであるが、堂内の棟札は梁の下に打ちつけられて左の文字が記されてゐる。

大明成化三年歳次丁亥秋九月二十日戊午重建

大清康熙三十四年歳次乙亥臘月十七日己巳再重建

又看月樓の額には

唐貞觀元年歲次丁亥季秋鼎建

懷聖光塔寺

康熙三十四年歲次乙亥仲冬重建

とある。これより以前の沿革は元の至正癸未に燒けて至正十年に重建されたと云ふ外別に徵すべきものが無い。光塔は第三章にも略說した通りの由緒ある珍建築で、懷聖寺の光塔と云ふよりは寧ろ光塔の懷聖寺と云ふべきものである。大殿の西南に當りて突如として聳立せる有樣は實に奇觀である。塔に關する記錄は少からずと雖も其の最重要なるものは大殿の東方の碑亭內にある二基の碑である。一は元の至正十年、他は淸の康熙三十一年のものである。大殿の西の碑亭にも二基の碑があるが、文字盡く磨滅して讀み難いのは殘念である。至正の碑の一部に曰く、

重建懷聖寺記

白雲之麓坡山之隈有浮圖焉製則西域礫然石立中州所未睹世傳自李唐訖今□□蟻陟左右九轉南北其扃其膚則混然若不可級而登也其中爲二道上出惟一戶古碑□漫而莫之或紀寺之燬于至正癸未也殿宇一空（下略）

此の碑の上部にアラビア文字で三行餘の文が刻してある。試にこれを土耳其君士但丁堡の知人に送つて其の解釋を求めた處、ほゞ其の意を知ること出來たが、玆にはこれを紹介することを略する。康熙三十一年の碑銘の一部は左の如くである。

重修懷聖塔寺記

余行天下多矣所見浮圖無不七級而上六面通門者始至廣州登高遙望有特立十餘丈若華表聳出城中上銳而多圓古色蒼翠問之曰懷聖寺浮圖也既而稽其年代蓋建于唐之貞觀有古碑然不可讀矣（中略）至正癸未燬于火元帥僧家訥馬合謀與之而志載成化中都御史韓雍重建則千年之間寺之廢興不知凡幾而此塔則巋然獨存固其形勢峻峭風火所不能侵而創造工力心力之精堅深遠固非後世得而及也（下略）

廣州府志には

懷聖寺在府城西二里唐時番夷所創明成化四年都御史韓雍重建留達官指揮阿都剌等十七家居之寺有番塔始于唐時輪囷直上一十六丈五尺絕無等級其頂標一金鷄隨風南北每歲五六月夷人率以五鼓登其絕頂呼佛號以祈風信下有禮堂歷代沿革載懷聖將軍所建故今稱懷聖塔明洪武二十年金鷄墮於颶風

謹案南海百詠云塔高六百十五丈蓋傳寫之譌今從黃通志塔在今番塔街俗稱光塔有回回寺在其左卽禮拜堂之故趾也

羊城古鈔には

懷聖寺在府城內西二里唐時番人所創內建番塔輪囷凡十有六丈五尺廣人呼爲光塔明成化四年都御史韓雍重建以

所留達官指揮阿都剌等十七家居之相傳塔頂舊有金鷄隨風南北每歲五六月番人率以五鼓登絕頂呼號以祈風信不設佛像惟書金字爲號以禮拜焉洪武二十五年七月金鷄惟颶風所墮送京貯內庫復以銅易之亦嘗于颶風萬曆庚子重修易以葫蘆康熙八年復墮于颶風

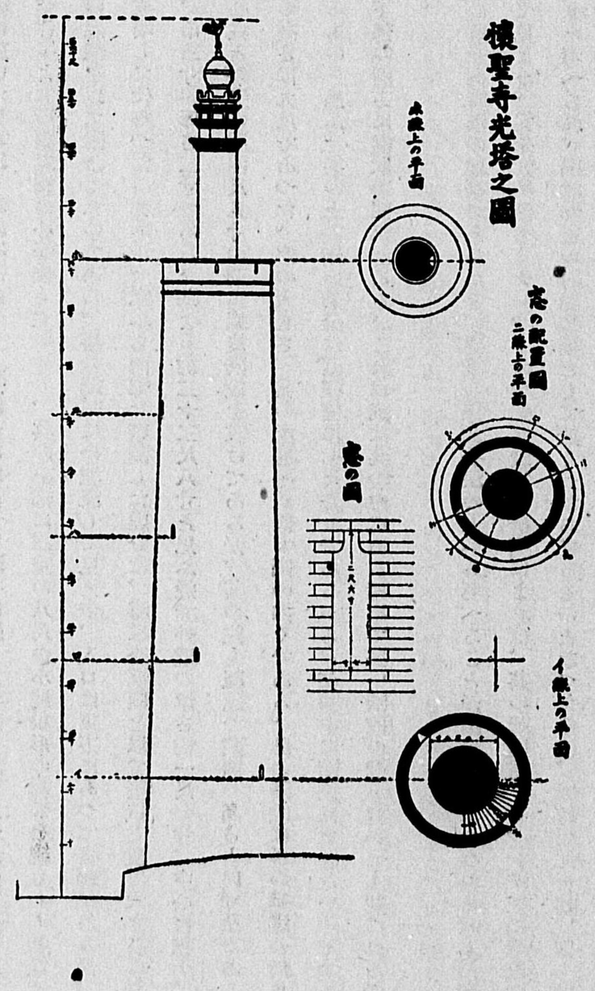
廣東考古輯要には

懷聖寺在府城內唐時番彝所創有塔曰懷聖塔其顚標一金鷄隨風南北每五六月夷人於五鼓登其頂呼佛號以祈風信

明洪武中金鷄墮於颶風今粤人呼曰光塔

などとあつて諸記錄大概同樣である。即ち何れもよく現狀と符合して居る。但し其の創立を唐の時であるとするは勿論信じ難い。然らば何時誰が建立したか、これは容易に決し難い問題であるが、桑原文學博士其の他歷史家の間には既にほゞ定說があつて、これを宋代の創建と見ると云ふ。元の至正の災に伽藍盡く燒亡したとあるが、此の塔は全部甎造であれば容易に燒滅することはない筈である。唯多年風霜に曝されて破損したので、時々大修繕を施したるものと見るのが至當であらう。即ち此の塔の年代は不詳であるが、假に宋の初期と見れば猶ほ千年の古建築である。即ち世界に於ける稀有の回教の古建築であることは慥かであると云はねばならぬ。

次頁に揭ぐる光塔の圖は前章に縷述した手續によつて、一部は實測し一部は目測したのであるが、全高を百六十五尺と押へたのは廣州府志等の所載の說によつたのである。そして其の頂に金雞の有つた時の形を試に復原したのである。現在は、其の上端は崩壞してよく分らぬ。此の塔の形を蠟燭に譬へると、其の心に當る上部の細い部分、殊に其の上端の如きは强度の双眼鏡で觀たのであるが充分に要領を得られなかつた。勿論此の圖が悉く正鵠を失はぬものと自信する迄は行かぬけれども、なほ大體に於いて大なる誤なきことを言明し得る積りである。



廣東に於ける回教建築

さて前圖に就いて見るに、塔は圓狀にして上部に至るに從つて漸次に細まり、高さ約百二十尺の所に雉蝶の上端を見る。こゝより所謂蠟燭の心が細く立ち昇り、其の上部に三重の八角の小屋根形の刳形を繞らしてをる。其の上は予の想像を以て附加したのである。塔の基部は今埋沒して見えず、入口は東方にあつた痕跡があるが、後にこれを充塡して仕舞つたのである。窓から內部を觀測した處では、塔は全部甎を以て築造し甎の大きさは長さ七寸五分、巾三寸、厚さ二寸である。基より約二十二尺八寸と思ふ邊で外壁の厚さ約一尺七寸、中心柱徑十二尺五寸、中心柱と外壁の間四尺五寸の間に螺旋階段を設けてあるが、其の段も甎造で蹈面の高さと同寸法である。其の天井の高さは九尺であつた。窓の大きさ、其の配置等はほゞ圖の如くである。此の階段は塔の雉蝶の所まで達してゐるものと思ふ。其の上の細い部分は直徑僅に七尺許りであるから、勿論中に階段は取れない筈である。但し其の下部の西方に龕狀の凹部がある。これは或は其の中にある極めて狹い階段の登り口かとも想はれるが明瞭でない。

偖て此の塔が何時頃の建築であるかを、建築の樣式手法の上から考へることが出來るであらうかと云ふ問題に立ち入つて見よう。元來光塔卽ちミナレットの發達は最近の研究によれば、其の起因遠くアッシリアの階段狀の神壇にありと考へられ、回敎伽藍の附屬建築として缺くべからざるものとなつたのは、回敎紀元百年、卽ち西紀第八世紀の前半に始ると考へられて居る。若しも此の學說が正しいとすれば西紀第七世紀の初めに於いて、しかもアラビアの故國を距る遠き支那に於いて、旣にミナレットの發生を見るべき道理がない。現今世界に於ける最古のモスクは埃及の古カイロにあるアムル寺 Mosque of Amr で西紀六百四十年である。若しも懷聖寺が貞觀二年にとすれば、それは西紀六百二十八年で、アムル寺よりも古きこと更に十二年であり、世界最古のモスクとなるのであるがこれは到底考へ能はざることである。又現存の世界最古のミナレットは埃及カイロ市のイブン・ツルン寺 Mosque of Ibn Tuln で西紀八百七十九年である、懷聖寺の塔がこれよりも古いとは考へられぬ。若しも埃及や叙利亞に最初のミナレットが八九世紀の間に成立し、其の後諸國に傳播したものと想像し得るならば、支那に傳つたのも亦十世紀以後でなければならぬ、卽ち宋代と考ふるのが極めて合理的のこととなるのである。但し現今の光塔の形式手法が宋代のまゝであるか、或は元以後の修繕の時のものであるかは容易に判斷されぬ。何となれば、光塔の形式手法や各部の裝折（デテール）等が餘りに簡單であり、且つ其の回敎に屬するの故を以て必ずしもこれと同時に、支那建築と同一の形式手法に據らざるべき理由があるからである。要するに光塔の形式手法は全く一種特別で他に比較すべきものがない。强ひてありと云はば、それは印度の古デリ Old Delhi に於けるクトブ・ミナール Ktb Minar でこれは西紀第十二世紀末の阿富汗王朝卽ち所謂パターン Pathan 朝の代に屬するのである。光塔が此の塔に類似の性質を有つてをる點から推して、矢張り第十二世紀を前後に距ること遠からざる時代と考へ、なほ進んで光塔がクトブ・ミナールより遙に原始的である事實を捕へて、第十二世紀よりは以前であると考ふるのは蓋し合理的な推測であらうと思ふ。

廣東に於ける回教建築　終

支那の住宅

支那の住宅

一　緒言

支那の住宅を說くことは非常に六ヶ敷い。第一支那の社會狀態、國民生活の有樣、彼等の趣味嗜好、さては一般工藝の樣子、なほ支那の思想史の要領を會得した上でなければ、其の住宅を說くことは出來ない譯である。併し斯くの如きことは到底當分の間望みがない。因つて茲には只だ自分が支那旅行の際實驗した處を述べ、支那の建築の現代の有樣が如何なるものであるかを紹介するに止めるのである。素より狹い見聞と、貧少なる材料と、迂鈍なる判斷とで組立てた粗末極まる記述であることを諒とせられんことを希ふのである。

なほ各論の中に滿洲の住宅の一項を加へることが必要であるが、此の問題に就いては、曾つて工學博士大熊喜邦氏が建築雜誌上に精細に記述されたから、茲にはこれを省略することにしたのである。

甲　總論

先づ支那の住宅の發生發達から說き起すことが順序として最も適當であるが、これは自分は未だよく研究してをらぬ。何分にも遺物の徵すべきものがなく、文獻は徒らに浩瀚で却つて要領を得難い。結局考證に躊躇に考證を以つてするやうなことになり、本誌の趣旨に副はぬ嫌があると思ふから、茲には一切發生發達の問題を避け、

現今支那の各地方に實施されつゝある住宅に就いて、其の一般の性質を略述することにする。

支那建築は元來非常な特色を有してゐるが、其の住宅も亦著しい特色がある。試みに箇條に分けてこれを列記して見よう。

第一　支那の住宅は勿論こゝでは中流乃至上流の縉紳の邸宅を標準とするのであるが、其の官吏であると商賈であるとを問はず、市中にあると田野にあるとに論なく、其の住宅は必ず壁を以て包圍する。壁は下等なものは泥である。中以上は磚卽ち煉瓦であり、宮殿の如き上等なものは磚の上に赤い漆喰を塗り、釉瓦で色々な裝飾が施してある。此の敷地の周圍を壁で取り繞くと云ふ風習は、非常に古くから發したもので、所謂牆又は牆壁と云ひ、周代の文獻に屢々此の文字が見える。これは畢竟自家防衛の目的で、支那では古へもなほ今日の如く盜賊の類が到る處に出沒し、しかも官憲は放任してこれを取締らない。故に個人は政府の力に依賴せずして自らこれに備ふるの必要があるのである。次に支那人は總て自己本位で公共的道德心に乏しい。故に資產ある者は自ら城廓を作り、城廓內に立て籠つて窃に自分だけの快樂を貪るのである。つまり外界から自分の生活狀態を覗かれることを厭ふのである。次に又支那の政府は古も今も、人民の膏血を搾ることを事としてゐる。若し市民の多少資產のあることが官吏に知られゝば、直ちに何等かの手段に由つて搾り取られる。故に市民は高き牆壁の中に隱れ、財寶は深くこれを藏し、戰々兢々として官憲の貪婪なる眼より免れんとしてゐるのである。斯くの如き社會の狀態や、支那人の天性が、其の住宅の周圍を牆を以て圍む習慣を作つたものと思はれる。

第二　支那の住宅の敷地は殆ど常に長方形で、間口が狹く、奧行が深い。若し敷地が方形若くはこれに近い形であつても、其の中に建てらるべき屋宇は長方形に奧深く配置され、其の殘部は庭園となり苑池となるのである。自分は未だ曾つて支那の住宅に於いて、左右に廣く前後に短い屋宇の配置を見たことが無い。これも秘密主義から起る現象で、殊に婦人室の如きは一番奧の房宇を以つてこれに充てられてゐる。何でも奧へ奧へと云ふ方針である。

第三　支那住宅は長方形の房宇と廊とを左右同形に排列したものである。これは世界無比の珍現象と云はねばならぬ。世界の何處にも斯くの如き配置の住宅は無い。勿論儀式的の住宅や、原始的の住宅にはこれに類する配置がある。日本でも彼の寢殿造の如きは中央に寢殿があり、左右には對の屋、廊、泉殿、釣殿が整然として左右同形に並んでゐた。併し書院造となると最早左右同形ではない。降つて茶席趣味の住宅になると故らに左右同形を破る趣向である。今日に於いては住宅の輪廓は不規則なる凹凸を有するものとなつて仕舞ひ、左右同形の輪廓は公共建築に限ることゝなつた。これは住宅の發達上必然の勢である。然るに支那に於いては數千年前の昔から今日に到るまで頑として左右同形の配置を改めないのは、住宅として進步發達してをらぬ證據である。否社會の狀態、生活の有樣が古往今來毫も變化してをらぬ所以である。

支那住宅に於いて規模の大小と云ふは、屋宇の數、門廊の重なりの多少を意味するので、一塊の一屋の大小ではない。例へば規模の最も簡單なる場合に、一門一房であれば、其の上は一門三房となる。此の場合は中央に大

房を置き、其の前に中庭を距てゝ左右に東西廂房（敷地南面の場合）が對立する。三房は或は分立し或は廊を以て連結する。其の上は門は二門となり三門となり、同時に房の數も廊の數も增すと云ふ工合である。要するに支那人の自己本位、孤立主義は其の住宅にも現はれてゐるので、主人の房、夫人の房、以下眷屬共の房が個々に獨立して決して相接觸しないのである。住宅の配置は常になほ廟祠又は他の公共建築の如くで、其の間に家庭的の一種の情味を見出すことが出來ない。日本の住宅は、玄關、客間、居間、臺所等が相依り相輔けて一塊の有機的組織をなしてゐるが、支那の住宅は全然これと趣を異にしてゐる。

第四　支那住宅は單層の建物である。若し住宅が同時に市街の舗である場合は勿論二層、時として三層にもなるが、獨立した邸宅は常に單層である。偶ま重層の建築を見るのは、それは特殊の目的で作つた樓閣で、住居の爲めの建物ではない。蓋し支那の住宅は前述の如く平面的に發達し擴張して行くので、上の方へ發達し擴張しては行かぬのである。

第五　支那は古へは坐禮の習慣であつたが、いつしか北方胡人の風を學んで終に立禮の風習となり、今日に及んだ。何日から立禮になつたかは確實に知らぬが、漢末までは坐禮であり、唐には既に立禮であつたことが確かであるとすれば、此の風習の一變したのは六朝の時で、北方胡人の風習が支那全般に普及したものと見ねばなるまい。即ち今の支那人は所謂椅子卓子式であるから、其の住宅の設備は床に石又は瓦を鋪くか或は土間の儘であり、時に板を張つたものもあるが、勿論土足の儘で出入するので、裝飾的の寄木張類は一切見ることが出來ない。

尤も寢るには必ず寢臺を用ひる。最下級の貧民は床の上に衣のみ衣の儘でごろ〳〵寢るが、これは除外例である。北清では炕が即ち寢臺である。これは床から二尺ばかりも高く作られた床の間のやうな設備で、中に暖房裝置があるのである。南清は氣候が溫暖であるから炕はないが、寢床は一段高く設けられてゐる。

第六　支那建築には、一切日本のやうな押入戸棚の類が無い。勿論襖、障子の類が無い。部屋の交通は普通開き戸で、時に引き戸もある。家具什器は、置棚又は櫃の類に入れて部屋の隅に置くのである。一體に支那人は餘り多くの什器を有つてをらない、偶ま澤山な道具を有つてゐる人は、其の爲めに一つの普通の部屋を塞げてゐるので、特に道具の爲めに倉庫を作り、又は戸棚押入等の設備をすると云ふことは無い。自分は往年端方氏が南京總督であつた時に彼を訪問したことがあつた。彼の愛藏する數千點の珍品中、石像石碑類は無慘にも軒下に雨露に曝されてゐた。周漢の古銅器類の或るものも皆屋外に散亂して雨露に打たれてゐた。自分は何故に斯くの如くなると問うたところが、彼は雨露に曝されて損傷し又は古色を失ふが如き物は、初めより愛藏するの價値が無いと云うて平然たるものであつた。其の他の小品は一切一部屋に藏されてあつたが、しかもこれは決して耐火でも耐震でも無い普通の部屋で、其の中に雜然と押し込まれてあつた。勿論彼等は時々刻々に甲の地より乙の地に轉任して官舍住ひをするので、永久的な自宅を有つてをらぬからではあるが、さりとて斯くの如き數千の珍品を蒐集しながら、これを耐久的建築の內に收藏しようと云ふ考へを起さない處は流石に支那式である。話はやゝ岐路に奔つたが、日本でも寢殿造時代には戸棚押入は無かつた。塗籠と云つて納戸のやうなところが家具の收藏所であ

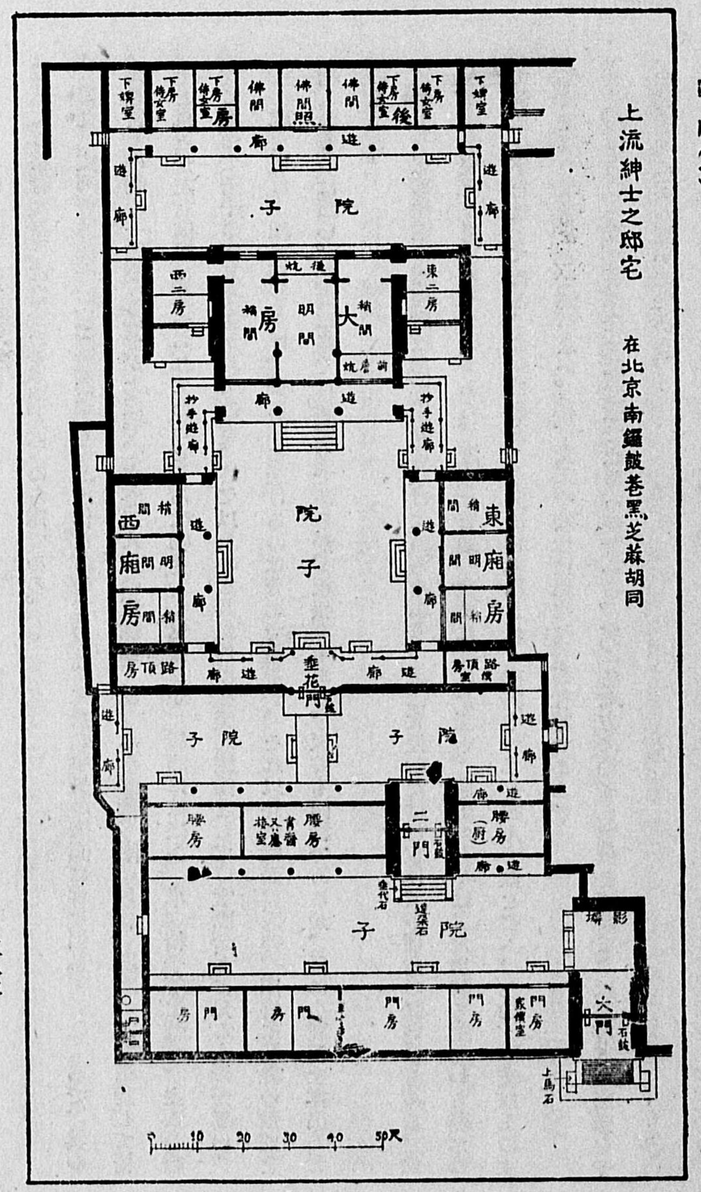
つた。日用の小道具は厨子などに陳べ置かれた。日本では其の後漸次に發達して今日の便利な設備が出來たが、支那では依然として太古の儘の有様を持續してゐるのである。

第七　支那の住宅の材料は磚即ち煉瓦と木材とである。獨立した一房の前面は中央に入口の唐戸を具へ左右に窓牖が配置されるが、他の三面は多くは煉瓦壁で圍まれてゐる。間仕切りは木材の薄い壁が多い。南清の或る住宅には全部木造で煉瓦壁を用ひないのもある。軒は勿論木造で桁から適當の深さに垂木を出し、屋根は瓦葺で、多くは切妻である。雨が少いから雨水の排泄の用意が不充分である。勿論樋が無く、排水の設備も不完全である。豪雨の時に中庭が池の如くになるのは珍らしいことでない。併し房と房とは廊に由つて交通するのであるから、中庭が池になつても別に痛痒を感じないのである。

第八　支那の住宅は他の建築と同様に全部彩色される。多くは暗赭色であるが、辨柄（べんがら）が主要顔料である。或は磚の粉末を豚の血で練つたもので塗り、朱で上塗をして、表面は桐油で仕上げるのもある。上等の住宅では一部に彫刻を施しこれを極彩色にする。兎に角決して木地の儘の住宅は無い。若し木地の儘のものが有るとすれば、それは紫檀、朱檀、黒檀其の他の有色の木材である。元來支那には木材が少くない。南清の一部には相當の材料があるが、北清では僅かに水邊に柳楊があるくらゐである。故に贅澤な建築になると雲南邊の木材を用ひるが、普通には皆柳楊其の他の雑木を用ひる。これが木地の儘では見られた物で無い。況んや不器用な鉋の仕上げは實に見苦しい。即ち僅かに色彩を以て此の狀態を糊塗してゐるのである。支那建築から色彩を奪ひ去れば殘る處は

■版（イ）

上流紳士之邸宅　在北京南鑼鼓巷黑芝蘇胡同



荒涼たる枯骨のみとは自分の常に唱へてゐる處である。

第九　支那普通住宅の室内裝飾は實に無造作なものである。主房の中央の廣間は客を引見するところで、其の突き當りの端の一段高い部分が上座で、主客二人分の座蒲團、枕、小卓が備へ附けられ、廣間の左右相對して椅子と卓とが左右同形に並べられてゐるところは物々しく見えるが、居間には寢臺、卓、椅子等を備へ、主人の需要に從つて若干の器具が置かれてゐる。さて以上の家具以外に建築的裝飾としては實際云ふに足るものが無い。柱に聯を懸け、楣に扁を上げ、壁に軸を懸けるのは普通であるが、それ以外に壁面、天井、床等に特殊の意匠を竭したものは無い。壁面は多くは紙張りであるが、板張りもある。天井も同樣であるが、稀に小屋組を露出したのもある。

第十　支那住宅の兩便所は房廊以外に設けてあるもあり、或は大便所だけは設けて小便所の無いのもある。婦人は必ず室内で用を便ずるのである。浴室は普通の家には設けが無い。庖厨は多くは、大房即ち主房から隔たつて別に一宇をなしてゐる。食卓は好んで中庭に持ち出され、家内中で卓を圍んで飯を喫ふ。勿論、中流以上の主婦は食事の世話などを燒かない。否、調理や給仕は總て男子の仕事である。

支那住宅の一般の事は先づ此の邊で止めるのである。次に各地方に於ける實例を擧げて、以上所述の箇條をやや具體的に示し度いのである。

乙　實　例

一　北清の住宅

北清の住宅の實例として茲に圖版(イ)に擧ぐるところは北京南鑼鼓巷黑芝麻胡同に在る一縉紳の邸宅である。自分が明治三十五年に清國に留學した時、此の宅は恰も清國政府の警務學堂教官の官舍に充てられてゐたので、自分も數十日間こゝに寄寓してゐたのである。これはさる滿洲出身の高級官吏の住宅で、此の種の建築の標準となるべきものと認められる。

先づ往來に面して第一門がある。入口の前に數級の石段があり、段の左右に上馬石と云ふ石がある。これは馬に騎るときに足かゞりとするのである。門扉の左右に石皷と云ふ皷形の石がある。これは日本の唐居敷に相當する位置にある。兩扉の表面には、元來神荼、鬱壘の二神の像を畫くのであるが、これを略して紅い四角な紙を菱形に貼り、紙の上に神荼、鬱壘の文字を書いたものが多い。

門の列びには門房があつて往來に接してゐる。門房は從者等の居る處である。第一門を入れば突き當りに影壁と云ふ障壁がある。左に折れて中庭即ち院子に入り、更に右に折れて正面に向へば第二門がある。門の左右に腰房があつて應接室の用を爲してゐる。第二門を通過すれば更に垂花門がある。これは軒に花の彫刻が垂下する例となつてゐるので斯く名づけられると云ふ。門の左右に遊廊が出て中央の廣濶なる中庭を取り圍む。其の正面に大房、左右に廂房を配置し、遊廊がこれを連結してゐる。大房は主人の住房でこれを三部に區劃し、中央を客間とし左右を居間としてゐる。兩廂房は眷屬の住房で又これを三部に區分し、中央を廣間とし、左右を居間としてゐ

る。大房の後に後房がある。即ち夫人の住房で、これが幾つかの室に區分され、夫人及び幼兒侍女等に分屬してゐるのである。

此の外に庖厨は第二門の右方にあり、其の又右方壁外に雜舍即ち倉庫、厩、下男の住居等がある。大房後房の右方房外は即ち後園である。元來支那に於いて庭園とは前庭後園を併稱するの意で、庭は房の前にあるもの、園は房の後にあるものと定まつてゐる。庭は多くは石敷や瓦敷で、樹木や花卉を植ゑない。只だ盆栽の類を陳列するのである。園には蔬菜を作り、草花を植ゑ、樹林を造り、贅澤な家庭では泉池を穿ち、假山を築き、例の文人畫に見るやうな岩石を配置したり、虹のやうな橋を架けたり、波狀の牆を繞らしたり、危なげなる洞門を鑿つたり、奇巧なる小亭を建てたりして樂しんでゐる。

斯くの如きは勿論支那第一流の巨邸である。これに次ぐものは總論にも述べた通り、門は第一門と垂花門の二つで、房室もこれに準じて少い。更に小なるものは第一門だけで垂花門も無い。併しプランの性質は何時も同樣である。

概して北清の住宅は何處となく悠揚として迫らないところがある。何となく茫洋たる氣分がある。これを南清の住宅に比べると餘程趣味の相異が認められる。

二　中清の住宅

中清住宅の一例として、茲に江西省南昌府の舊道臺某氏の邸を擧げる（圖版四）。これは支那住宅としては上流のもので規模も相當に宏大であり、入口の如きは堂々たる構へであるが、例の如く極端なる左右均齊式で、如何にも住むに勝手が惡さうに見える。第一中央を貫通せる空地及び通路が大なる面積を占領して、實用の房室の面積が比較的少い。各室の連絡が不充分である。光線が不足である。便所の設備が無い。庭が全く隔離して房室と何等の交渉が無い。柱は主要なる室に於いて四尺六寸間に立てられてゐるが、これは餘りに密接に過ぐる。これに五割を增して六尺九寸間に柱を立てゝ澤山である。

中清一帶の中流以上の紳士の邸宅は略ぼこれに準ずるものであるが、北清のものに比べると、やゝ窮屈な配置で、緊縮してゐる趣がある。

三　四川の住宅

四川は元來中清の部に屬するのであるが、楊子江下流の地方とは又若干の相違があるから、別に茲に其の一例を擧げるのである（第一二六〇圖――見學紀行――參照）。これは重慶附近の中流以上の官吏の住宅であるが、大體の調子は彼の南昌の道臺の家と類してゐる。只だこれは中庭即ち天井が多數であるが、其の代り其の面積が小さい。

此の地方の家屋の普通の構造形式及び細部の名稱に就いて、多少見聞し得た處をこゝに圖解して置くのであるが隨分不思議なものである。勿論これは支那全般に共通するのではなく、只だ此の附近のみに通ずるのであるかも知れぬ。それにしても大いに興趣あることと思ふ。此の圖解以外に尙ほ數種の名稱を擧げて見よう。

柱（マルベンラ）、知麻柱（カクベシラ）、天花板（テンジャウイタ）、地樓板（ユカイタ）、窓子（マド）、爽磋（クッ

イシ）、下水同（タテドヒ）、門墻子（シャッター）、門雙（クワンヌキ）、門肖（八双ガナモノ）、瓦溝（屋根のタニ）瓦齊（屋根の大ムネ）、敖魚（シャチホコ）、燕子（ツマノハメイタ）、正吉（大棟の鬼板）、寸吉（下り棟の鬼板）、葉角（ノキノモチオクリ）、寶頂（屋上の露盤）、

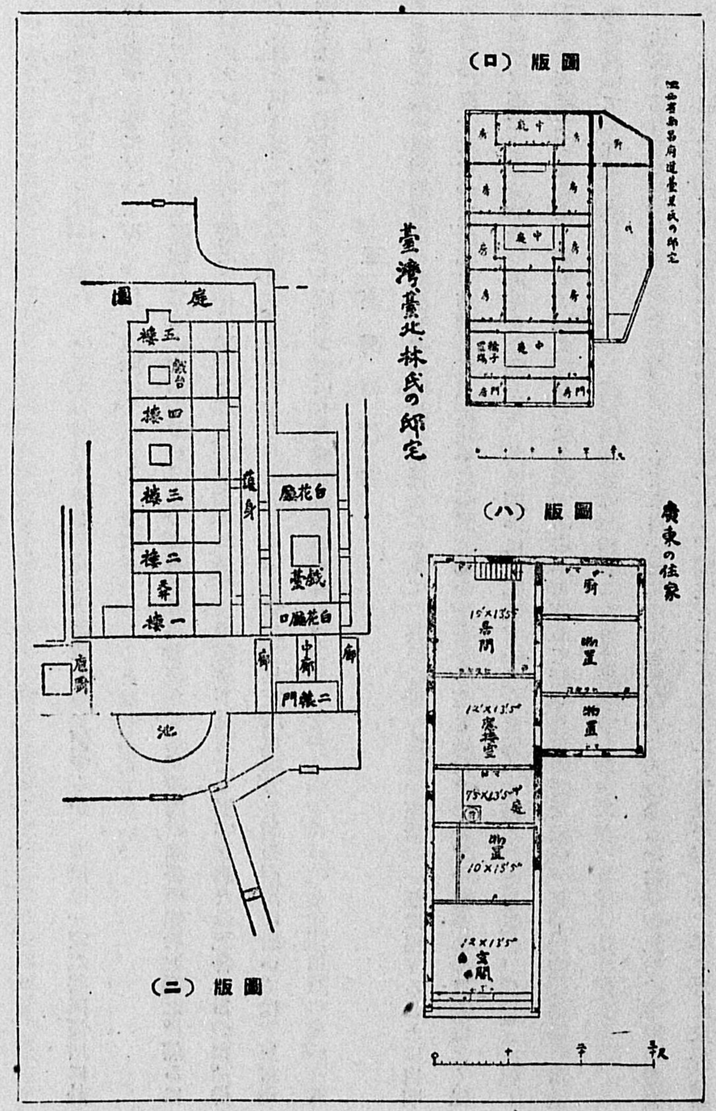
但し建築局部の名稱の研究は自ら別問題になるから今は說かない。彼の宋の李誠の撰にかゝる營造法式や、奪天工や、近くは舜水朱氏談綺などに擧げてある建築細部の名稱の比較研究は、何れ他日別に述べて見度いと思ふのである。

四川省は木材に富んでゐる。從つて其の住宅が往々、全然木材を以て構造され、磚や石を混用しないものがある。建築的形式手法は自然輕快となり、一種の溫情がそこに現はれて來る。

四　南清の住宅

南清住宅の一例として、廣東省城內の一家を擧げる。（圖版八）これは先づ中流の家庭の住屋であるが、規模が小さいから左右均齊式にする餘裕がない。只だ一列に房を配置したので、其の窮屈なことは云ふ迄も無い。但し二階が後半部に設けられてゐるので、兎も角も住ひ得ると云ふまでである。

斯くの如き小規模なる住宅なるに拘らず、玄關に不相應の面積を取り、應接室だけは兎に角中庭に臨んで、やゝ華麗な窓などを用ひてゐるが、居間は甚だ不愉快なる室であり、二階は飽くまでも天井の低い、陰氣な房室である。しかも建物の外觀だけはさまで見苦しくもない。以て支那人の住宅に對する理想の一端を推することが出來る。



ると思ふ。

此の家にも便所の設けは無い。小便は勿論門外何處を問はず隨意に用を便ずるが、大便は一定の共同便所に赴いて便ずる事になつてゐる。併し實際は矢張り全く無制限であることは云ふ迄も無い。

廣東の大規模の住宅に關しては多く知らぬが、曾つて總督衙門を訪うて其の構内の總督の住居を觀た。然るに其のプランは少くとも嚴正なる左右均齊のものではなかつた。可なり不規則なる屋宇と廊との配合であつた。併しこれを以て直ちに廣東住宅の標準とすることは出來まいと思ふ。只だ廣東地方を始め南清に於いては、左右均齊主義が、幾分北清地方より嚴重でないと想像されるのである。

五　臺灣の住宅

臺灣は其の地理的位置と歴史的及び政治的關係とから見て、其の建築の性質が南清の一部に屬することは自明である。自分は曾つて臺北を訪問して只だ僅かに臺灣北部の建築の一斑を見たゞけで、中部南部の實際はよく知らぬが、臺北の富豪林氏の邸宅を訪問して、其の明かに支那特有の性質を備へてゐることを見た。（圖版二）但しこゝに擧げた平面圖は、倉皇の際に目測したものであるから極めて精確なものでは無い。且つ房室の名稱、用途等に就いても說明を得なかつたので、甚だ隔履搔痒の感があるのは遺憾である。

林氏の邸の堂々たる規模は、支那内地に於いても自分は其の比を見ない。其の參道や前庭の池や、中庭の戲臺や、其の他の調子は殆ど廟祠や公共建築と同趣である。邸宅としては如何にも異樣であるが、要するに支那建築に於いて邸宅と廟祠と公共建築との間に全然共通のプランが行はれてゐることも證明してゐるものである。

臺灣の住宅のプラン及び設備等に於いて支那本土のものと相異なる點は蓋し種々あるであらう。自分が最も顯著なる點と思つたのは臺灣に於いて房の前部に廣い深い列柱の廊を備へることである。多分これは炎暑に對する防備であると思ふ。外形に於いては屋根の形と其の裝飾に特色がある。大棟全體が弓の如く彎曲した形は南清にも類例を見ない處である。

以上列記した外に、支那の各地にそれぞれ地方的特色を有つた無數の住宅の種類があることは勿論である。試みに其の最も極端なるものを揭げて見ると次の數種がある。

甲　校倉造

これは、自分は雲南の西南部、潞江以西緬甸に通ずる國道附近に於いて見たのである。多分四川省の或る方面にも現存してゐるのであらうと想像される。これは最單純な校倉造で、草又は板を以て屋を葺いてゐる。材は丸木ではなくて、略ぼ三角形に造られてゐるところは我が國の正倉院式に髣髴たるものであるが、床は地上に接して、高く上らげれてをらぬ。勿論これは低級の農民の住居で、一村一邑悉く校倉造であるが如き場合は自分はまだ見聞してをらぬ。

乙　洞窟

これは自分は河南省洛陽附近より西方陝西省西安府に通ずる國道に沿うて諸所に實見したのであるが、聞くと

ころによれば西安府以西の各地方にも澤山あると云ふ。又甘肅省にも少からずと聞いた。兎に角黃河流域に屬する北清に特有のものと想像される。南清の方に此の實例の有無はよく知らぬが、少くとも自分の見聞の範圍では無いやうである。

さて此の洞窟は、北清一帶の粘土層が永く雨水に浸蝕されて自然に絕壁となつたところへ、往來と水平に横に穴を掘り込んだもので、穴の入口は多くは圓拱又は尖拱形をなし、下には扉を備へ、上の拱形の部分は窓として光線を採つてゐる。入口の横手に往々高窓を穿つた例もある。

內部は廣狹一樣でない。或は入口の中に單獨の一小室が有るのみの物もあり、或は此の室の左右に更に一箇乃至數箇の小房を穿ち、物置やら庖厨やら、可なり設備の整うたものもある。室內は何れも掘り放しで、木材で床や天井や、壁などを張つたものは見なかつた。

北清には一村落悉く斯くの如き洞窟を家とするところがある。しかも村民はこれに永住せず、時に一村悉く居を轉じ、他の地方へ行き新たに洞窟を掘ることがある。自分は旅行中、粘土の小丘面に蜂の巢の如き洞窟の遺棄された跡を見たことが屢々ある。

聞く處によれば陝西の北部には横穴と縱穴の二種があると云ふ。縱穴の場合には上に蓋をして雨水の侵入を防ぐと云ふ。又一家の中に死者を出すときは、此の穴を埋めて他に轉居すると云ふことである。若し然りとせばこれ我が邦上古の風俗と或る類似の點を有するものである。

丙　泥　造

これは北清地方殊に長城以北に於ける低級の農民の住宅である。勿論此の邊は土地荒漠として樹林が無い。見渡す限り野も山もみな禿兀として岩石と砂土のみである。故に普通土民は其の住屋を泥土を以て造らざるを得ない。即ち其の壁は砂土を練り固めて築き上げ、屋根は下地に高粱の束を架け、其の上に泥土を塗つて造るのである。然るに此の泥壁泥屋は案外に堅牢で、此の地方に普通なる風と雨とによく耐へてゐる。勿論此の地方には豪雨が無い。否、雨が一體に甚だ少い。偶ま非常な豪雨があれば屋根は破損を免れないが、平然として復た直ちにこれを修造するのである。風は隨分猛烈であり、往々屋を毀ち壁を破るが、土民は又平然として自ら直ちにこれを修造するのである。

丁　大　社　造

湖南省沅江縣附近で自分は奇妙な民家を見た。其のプラン及び前面の形は全然我が出雲の大社の如く、妻入であつて、入口は中央の柱の右手にある。蓋し古代の原始的民族の作る原始的建築の形式は、期せずして同一型に歸するのであらう。壁は粗造の甎又は木材を以て造り、輪廓はゴシック的尖拱、又は印度式尖拱をなし、屋根は多く藁を以て葺いてゐる。しかも屋上に藁を束ねて載せた形が、我が勝男木によく似てゐるのも面白い現象である。

支那住宅に就いて述べねばならぬ事は實に夥しいのであるが、最初にも言つて置いた通り、茲には只だ極めて

簡單に自分の見聞を基礎として支那住宅の一般の建築的性質を述ぶるに止めるのである。他日更に稿を更めて此の問題を繼續し、おひ〳〵詳細を竭し度い希望である。本篇の材料の極めて貧弱なると、記述の極めて不徹底なるとは自分の讀者諸君に對して切に宥恕を請ふ處である。

支那の住宅　終

東洋建築の研究（上）　完

昭和十八年九月一日　初版印刷
昭和十八年九月十日　初版發行
昭和二十年五月十五日　再版發行（一千五百部）

東洋建築の研究（上）
定價金五十圓也
價格査定番號五の六〇號

著者　伊東忠太
發行者　草村松雄
東京都麻布區飯倉町六ノ一四
印刷者　稲葉惠一
東京都牛込區早稲田鶴巻町二六〇
配給元　日本出版配給統制會社
東京都神田區淡路町二ノ九

（上・下揃金壹百圓、分壹せず）

（日本出版會承認　53,40126）

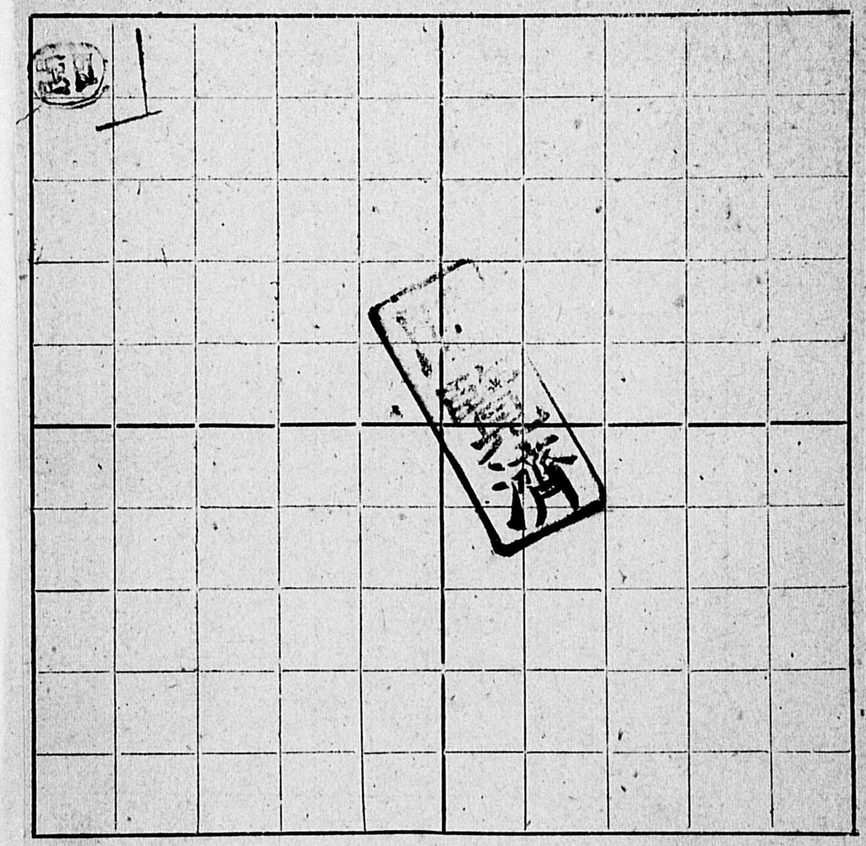
發行所　東京都麻布區飯倉町六丁目一四番地
株式會社　龍吟社
出版會會員番號一一〇〇一六番
電話赤坂（48）一六五九番
振替東京六九一〇〇番

社會式株刷印和明　本製・（東京131）所刷印藁稲　刷印

997
180

131

年　月　日



終